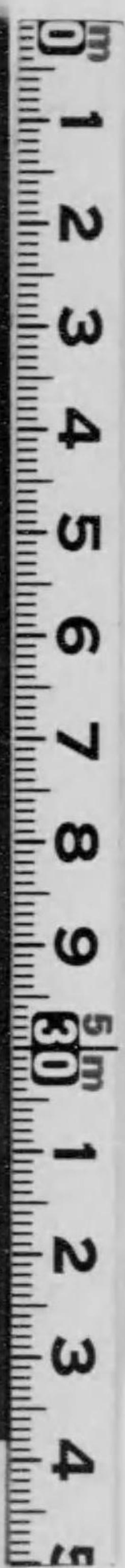




492.7
G72
Ⓢ



始



コ-4042

九

~~60380~~

492.7
G72



醫學博士 後藤道雄 著

ヘツド氏帶ノ臨牀的應用ト鍼灸術

東京 刀圭書院

大正
6. 10. 8
内交

序

歐洲大戰亂ノ影響ハ惹ヒテ我醫學界ニモ波及シ、民間治療法ノ學術的研究續出スルニ至レリ。

本邦ニハ古來鍼灸術ナル特殊療法アリ。一定ノ疾病ニ對シテ著效ヲ示ハスコトアルハ古來ノ實績ニ徴シテ疑フ可カラザル所ナリ。然モ其存在ヲ醫學界ニ認メラレズシテ、僅カニ一部ノ鍼灸業者ノ間ニ、餘脈ヲ保チツ、アルニ過ギザルハ全ク學術的ノ研索ヲ缺如スルニ基クモノナルベシ。

余ハ茲ニ自己ノ研究成績ヲ根據トシ、此一巻ヲ成セ

リ。若シ同好達識ノ士ノ追補ヲ得、溫熱療法、水治療法
 進歩ノ一階梯トモナルヲ得バ、著者ノ幸榮何物カ之
 レニ如カム。

著 者 識

ヘッド氏帶ノ臨牀的應用ト鍼灸術

目 次

第一章	ヘッド氏帶トハ何ゾヤ	一
第二章	ヘッド氏帶ノ検査法	五
第三章	諸疾患ニ於ケルヘッド氏帶	九
第四章	ヘッド氏帶ノ治療的應用	二〇
第一項	溫度ノ血液分布ニ及ボス影響	二一
第二項	溫度ノ深部ニ及ボス作用	二三
第三項	腦膜疾患患者ノ頭部冷却	二六
第四項	心臟病患者ノ胸部冷却	三〇
第五項	肺出血及腸出血ノ冷却療法	三四
第六項	鎮痛法トシテノ溫卷法	三四
第七項	鍼灸術	三五
第五章	灸術	三五

目次

第一項	もぐさ灸	三六
第二項	灸ノ種類	四二
第三項	温灸	四五
第四項	漆灸	四七
第六章	鍼灸ノ經穴トヘッド氏帶	四九
第七章	灸術ノ治療的作用	五五
第八章	鍼術	五七
第九章	ヘッド氏帶ノ臨牀的應用總括	五九

目次終

ヘッド氏帶ノ臨牀的應用ト鍼灸術

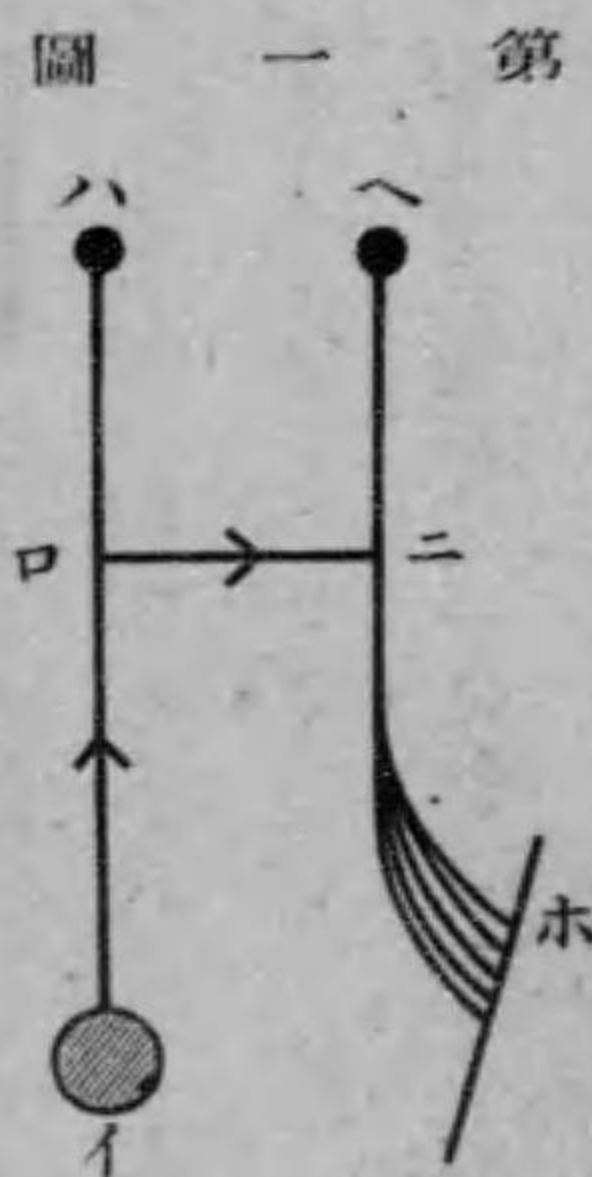
醫學博士 後藤道雄 著

第一章 ヘッド氏帶トハ何ゾヤ

總テ内臓ノ疾患ニ際シテ、其臓器ニ相當スル或一定ノ皮膚ニ於テ知覺過敏帶アルハ、既ニジ
 デナーム以來、人ノ注目スル所ニシテ、千八百七十五年ニ至リ、ラングダ始メテ精細ニ之ヲ記述
 シ、千八百八十八年、ロス亦之ニ就テ大ニ探究スル所アリ、次デマッケンジー及ビヘッド亦之レ
 ヲ確メシヨリ、遂ニヘッド氏帶 *Headache Zone* ナル名稱ヲ用フルニ至レリ。

カ、ル知覺過敏帶ハ如何ニシテ生ズルモノナルカ。今左ノ模型圖ニヨリテ説明スレバ、
 内臓(イ)ヨリ發セル刺戟ハ其中心部例ヘバ脊髓(ハ)ニ向ツテ傳ハル外(ロ)ニ於テ隣接セル
 神經(ニ)ニ傳ハリ、之ヨリ(ニ)ノ中樞(ヘ)ニ達ス。(ヘ)ニ於テハ其末梢タル皮膚(ホ)ヨリノ
 刺戟ナリト感ズ。斯ノ如クシテ内臓(イ)ノ刺戟ハ皮膚(ホ)ニ於ケル刺戟ナリト誤マリ感ゼ
 ヘッド氏帶トハ何ゾヤ





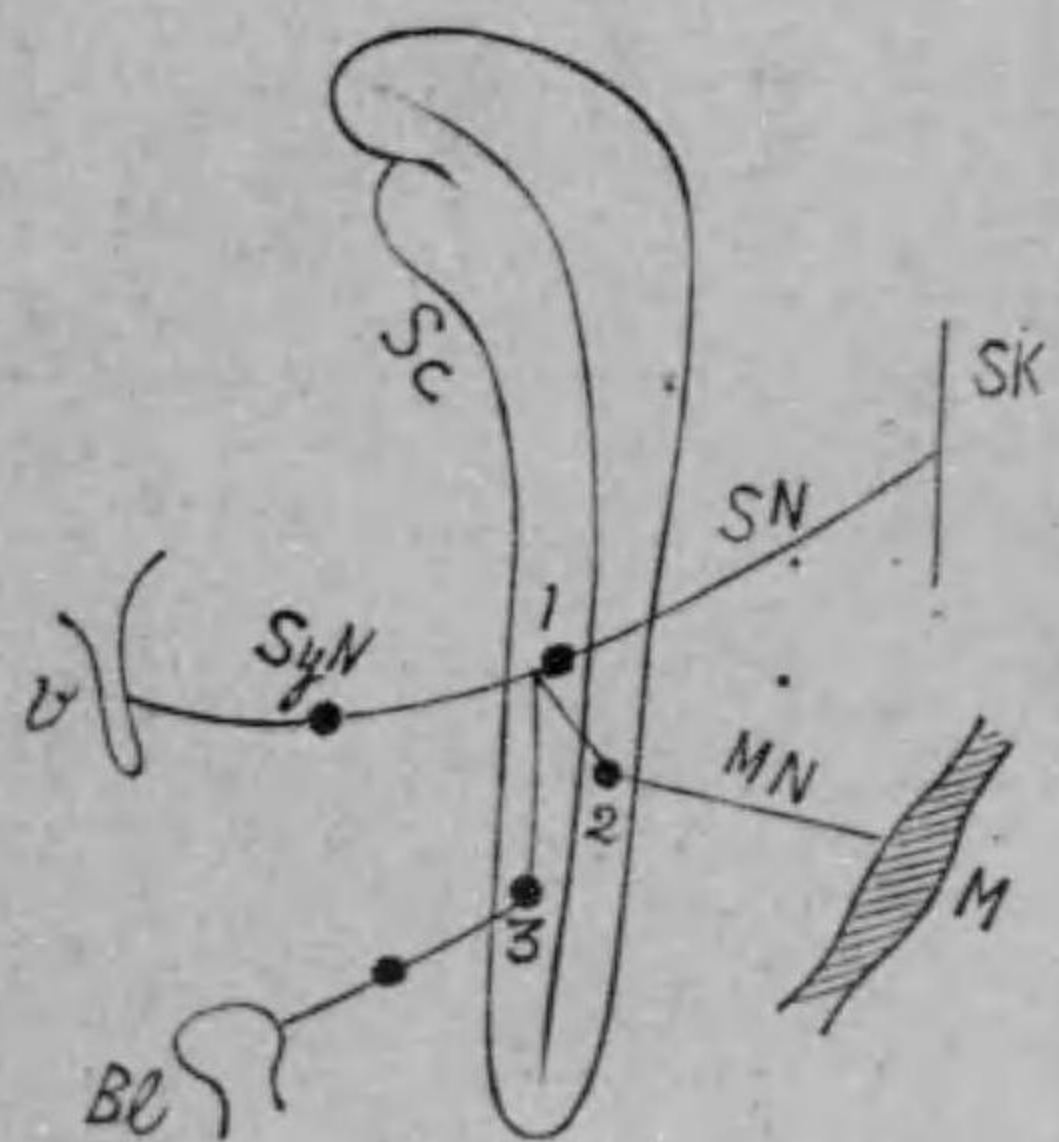
マッケンジーハ盲腸炎ノ研究ニ際シ、其症候トシテ一定部ノ皮膚ニ知覺過敏帶アルコトヲ報ゼリ。曰ク、内臓(イ)ヨリ脊髄(Sc)ニ向ヒ交感神經(SyN)ヲ經テ絶エズ刺戟ヲ傳達ス。然レドモ健康體ニテハ此

刺戟ハ脊髄ニ感受セズ、唯病的ニ其刺戟ガ増大セル時ハ、脊髄ニ達セル刺戟ハ、隣接セル細胞ニモ傳ハル。例ヘバ(1)ノミナラズ、(2)及ビ(3)ニモ傳ハル。(1)ハ知覺神經(SN)ニツナガリ、(2)

ハ運動神經(MN)ト、(3)ハ他ノ臟器即チ膀胱(BL)ト連續ス。斯クシテ知覺神經(SN)ニ至レルモノハ、其末梢皮膚(SK)ノ知覺過敏ヲ生ジ、運動神經(MN)ニ及ベルモノハ、横腹筋及ビ腹直筋ノ攣縮ヲ起シ、膀胱ニ至レルモノハ、尿意頻數或ハ排尿困難ヲ生ズト。

マッケンジーノ此假定說ハ、又ヘッドト相一致スルモノナリ。

第 二 圖



ウィルードーハ胎生學上ヨリ說ヲナシテ曰ク、胃ハ腸管(廣義ニ於ケル)ノ彎曲及ビ廻轉ニヨリテ生ズルモノナレバ、胃ノ前壁ハ左側ノ神經ヨリ後壁ハ右側ノ神經ヨリ主宰セラル、故ニ胃ノ前壁ニ潰瘍アルトキハ、ヘッド氏帶ハ體ノ正中線ヨリ左側ニ胃ノ後壁ニ生ゼル潰瘍ニ際シテハ右側ニアリト。

此說ハ亦、ヘッド氏帶ガ交感神經ニヨリ反射的ニ生ズルヲ證スルモノナリ。

ヘッドノ言ニ從ヘバ、ヘッド氏帶ニ於テハ痛覺及溫覺ハ過敏トナルモ、觸覺ハ然ラズト云フ、サレドカストハ筆、指頭或ハ尖端鈍ナル物體ヲ以テ摩スルモ、尙ホ感覺ノ高マレルヲ實驗シ、ヘッド氏帶ニ於テハ痛覺溫覺ノミナラズ、又觸覺モ鋭敏トナレルヲ證セリ。

サレドヘッドノ假定說ニ對シテハ、幾多ノ反對者ナキニアラズ。就中レナンデルハ内臓ガ決シテ疼痛ヲ起スモノナラズトノ假定ヲ根據トシテ、根本的ニ、ヘッドノ說ヲ覆サントセリ。曰ク、交感神經或ハ迷走神經(反回神經ヲ分岐セシメタル後ノ)ノ配下ニアル諸臟器ハ決シテ疼痛ヲ生ズルコトナシ、唯壁側腹膜ハ緊縮或ハ伸展ニヨリ疼痛ヲ發スルコトアリ。腹腔ノ疼痛ハ蓋シ此腹膜ヨリ發スルモノニ外ナラズ、(但シ肋間神經、腰部神經、薦骨神經ハ腹腔ニ於ケル痛覺神經纖維ヲ有ス)、斯ノ如ク、内臓自個ハ決シテ疼痛ヲ發スルコトナキヲ以テ、腹腔ノ疼痛ハ炎衝或ハ化學的、中毒性、又ハ腸ノ蠕動等ニヨル機械的刺戟ガ壁側腹膜ニ及ベル結果

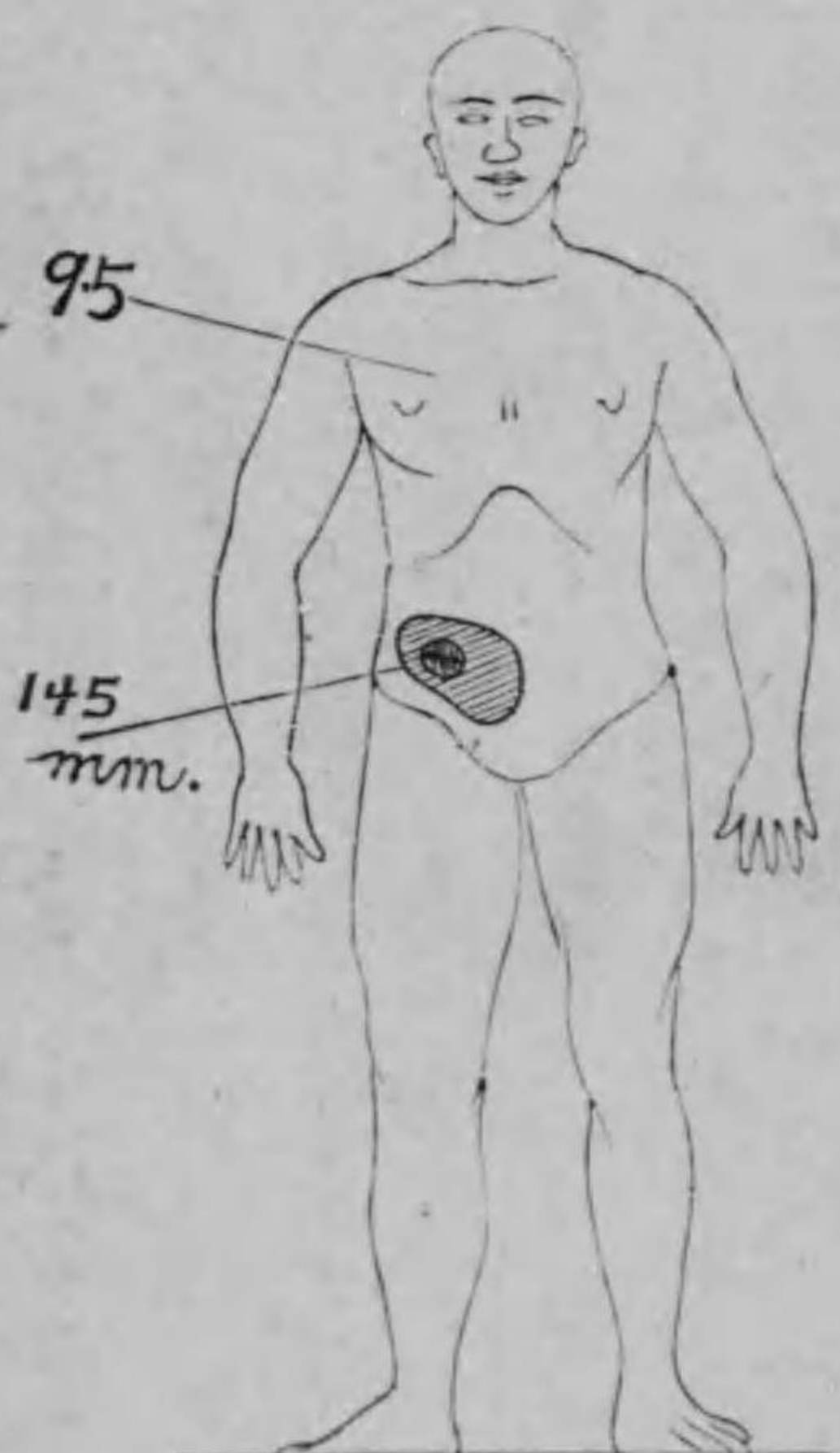
タルニ過ギズ。而シテ此疼痛ニ伴ヒテ一定部ノ皮膚ニ知覺過敏帶ヲ生ズルハ、其内臟ヨリ淋巴管炎ヲ生ジ、牽ヒテ脊髓神經鞘内或ハ其周圍ノ結締織ニ炎衝ヲ起スニヨルト。サレドカストハレナンデルノ説ヲ駁シテ曰ク。若シ神經鞘内或ハ其周圍ノ結締織ノ炎衝ヲ起ストセバ、爲メニ神經痛ヲ惹起スベキ筈ナリ。又眞ニ炎衝ニヨルモノトセバ、カ、ル炎衝ヲ最モ起シ易カルベキ肋膜炎ノ際ニモ、知覺過敏帶ヲ生ズル筈ナリ、然ルニヘッド、ヘーチル、バルテンスタイン及ビカストノ研究ニヨルニ、肋膜炎患ノ際ニハ決シテ知覺過敏帶ヲ證明セズ、又ヘッド氏帯ハ淋巴管炎ヲ起サル疾病、例ヘバ心臟病ノ際ニモ存在ス。又決シテ神經ト連續的關係ナキ部ニ知覺過敏帶ヲ證明スルコトアリ。腹腔疾患ニ際シ、頭部又ハ上肢ニ知覺過敏帶アルガ如キナリ。以テレナンデルノ説ノ其當ヲ得ザルヲ知ルベシ。且ツレナンデル自身モ、カ、ル場合ニ、實際ニ淋巴管炎ヲ起セルヲ見シニ非ズ。又文獻ニ徵スルモ、決シテカカルコトナシト。

ノートナーゲルハ腸ガ緊縮スレバ機械的ニ腸壁神經ヲ壓迫シテ痙痛ヲ起スト説キシコトアリシモ、後ニハ、腸管ノ收縮ニ伴ヒ、腸ノ貧血ヲ來シ、其結果、疼痛ヲ起スト説明セリ。レナンデルハ大腸ヲ電氣ヲ以テ刺戟シ、大腸ノ收縮ヲ伴ヘル著シキ貧血ヲ見シモ、決シテ痙痛ヲ起サマリシヲ以テ、ノートナーゲルノ説ハ信ズルニ足ラズト駁セリ。サレドカストハ曰ク、人工的ニ生ゼシ攣縮ト、病的ニ生ズル攣縮トハ決シテ同一視スルヲ得ズ、病的ノ攣縮ハ恐ラクハ人工的ニ模倣シ得ザル程、著シキモノナルベシト。カクテカストハ再ビレナンデルノ説ヲ否認セリ。

以上述べ來リタルガ如ク、知覺過敏帶生成ノ原理ニ關シテハ、其假定説ヲ異ニスルモノアリト雖、然モ實際上、知覺過敏帶ノ存在ニ就テハ既ニ疑ヲ挾ムノ要ナシ。

第二章 ヘッド氏帯ノ検査法

第三圖 (盲腸周圍炎)



ヘッド氏帯ノ検査法

ヘッド氏帯ヲ檢スルニハ、通常次ノ如キ簡單ナル方法ヲ用フ。即チ示指ト拇指トヲ以テ被檢者ノ皮膚ヲツマミ上ゲ、何レノ部位ニ於テ痛覺ガ最モ鋭敏ナルカ

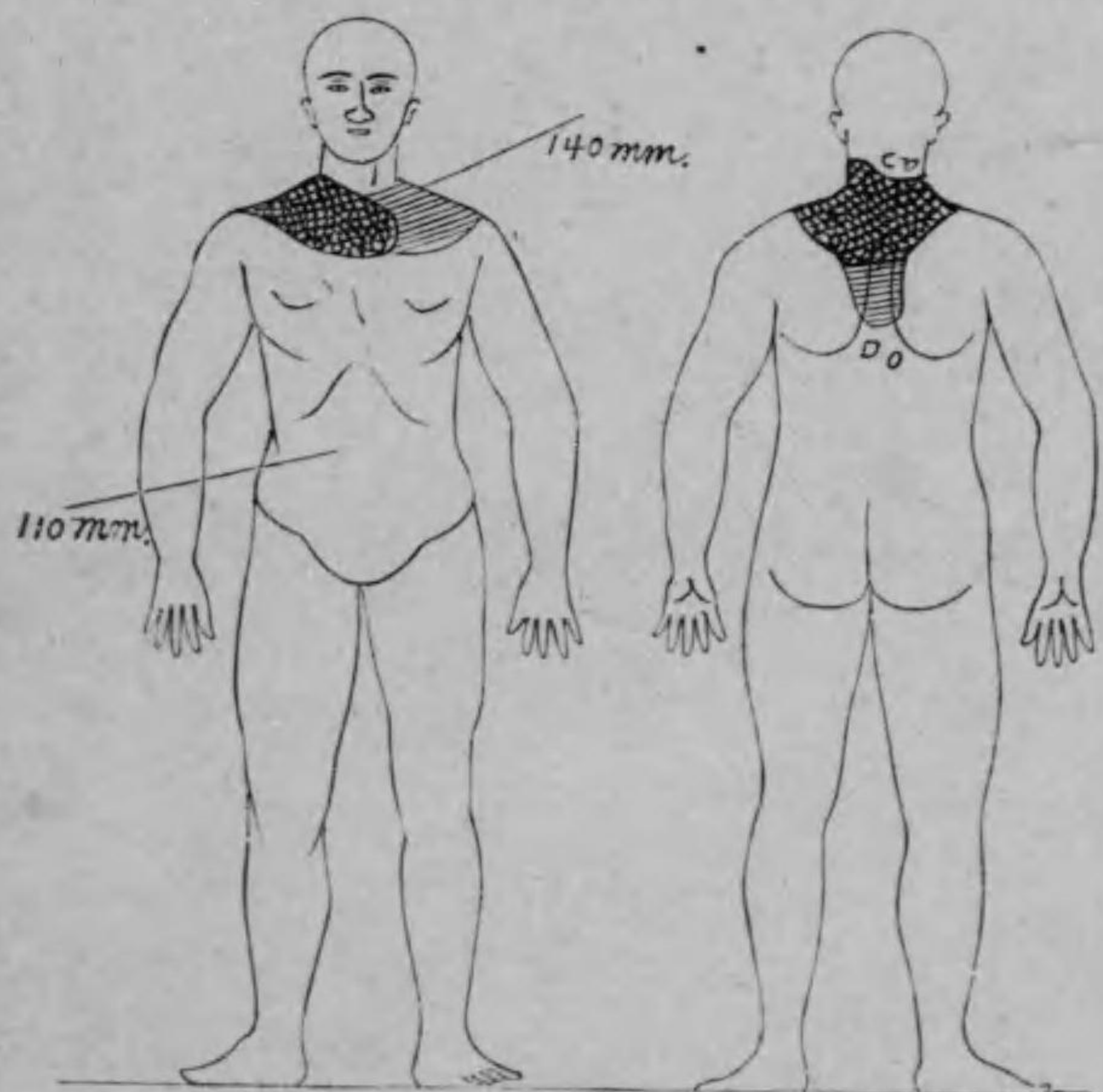
ヲ檢ス。此際皮膚ヲ強壓シ、内部ノ感覺ト誤認セザル様注意スベシ。唯皮下組織及筋肉少ナキ部ニ於テハ、皮膚ハ直接ニ骨ニ隣接セルヲ以テ、ツマミ上グルコト困難ナリ。此時ハ針ヲ以テ

輕ク刺シ、何レガ最モ痛覺過敏ナルカヲ檢スベシ。

神經質ノ患者ニテハ檢査甚ダ困難ナレバ、決シテ煩ヲ厭フコトナク、根氣ヨク數回反復檢査スルヲ要ス。

時トシテハ又溫覺ヲ以テ檢スルコトアリ。サレド智識ノ發達少キ者、或ハ小兒ニアリテハ以上ノ方法ヲ用フル

第 四 圖 (炎 柱 管 氣 及 碍 障 膜 瓣 臟 心)



モ、確實ニ患者ハ其知覺ヲ告白スルコト能ハズ、從ヒテ其結果モ亦不確實ナルヲ免レズ。此缺點ヲ償ハンガ爲メニ、余ハ感傳電氣ヲ用ヒテ檢セシニ、甚ダ良好ナル成績ヲ得タリ。即チ感傳

電氣ヲ弱キヨリ初メ、

漸次其強度ヲ増シ、或一定ノ強サニ至レバ、

初メテ其皮膚ニ、感傳電氣個有ノ感覺ヲ感

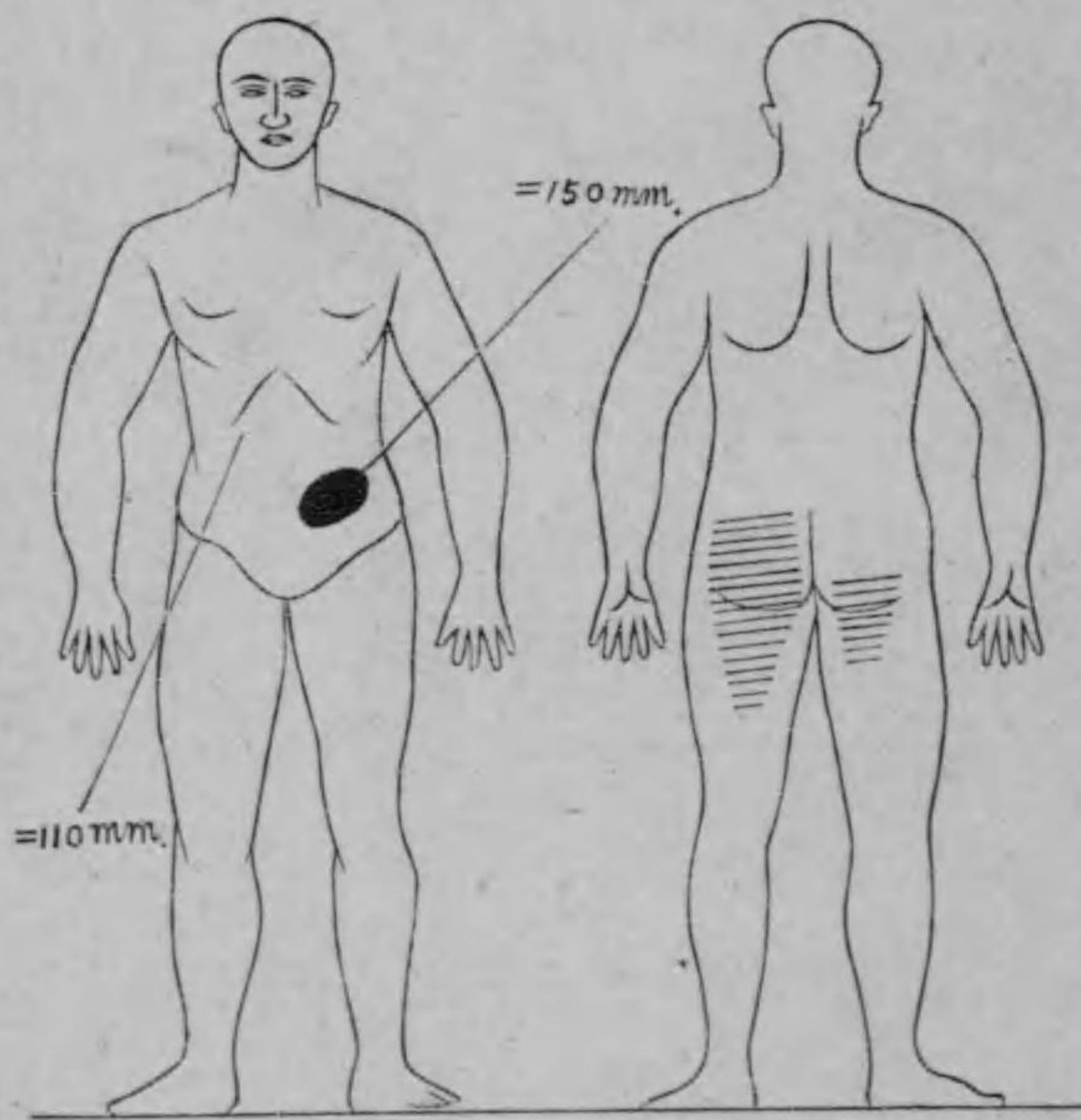
ズ。斯ノ如クシテ知覺過敏帶ト健康部ニ於ケ

ル電氣ノ強サ、即チ「ロルレンアブスタンド」

ヲ定ムル時ハ此兩者ヲ比シ、ヘッド氏帯ニ於テ

ハ健康部ニ比シ、幾何

第 五 圖 (炎 臟 腎 及 病 斑 紫)



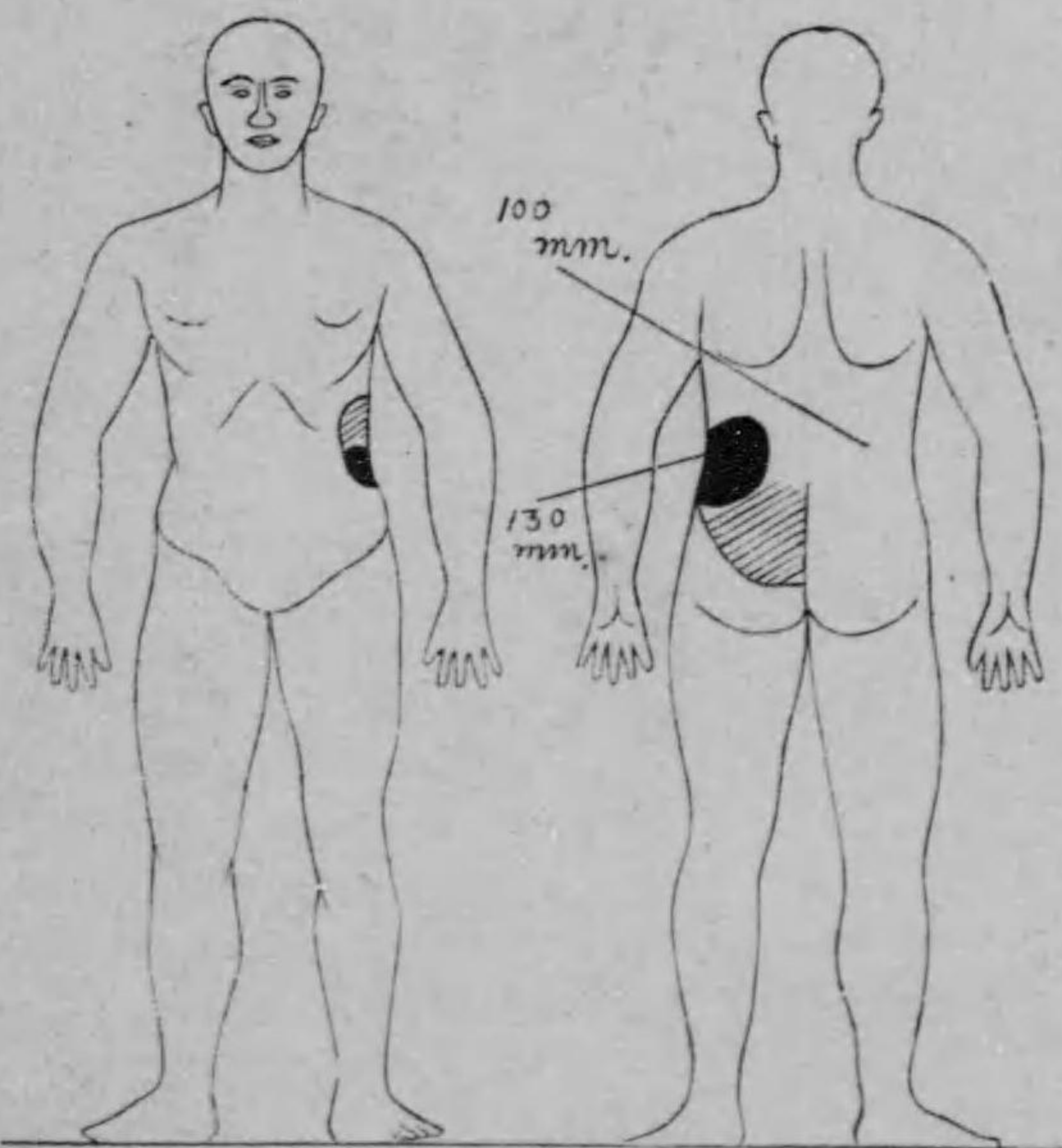
丈ク知覺過敏ナルカヲ數量的ニ示スコトヲ得。例ヘバ第三圖盲腸周圍炎患兒ニ於テ、ヘッド

氏帯ノ部ハ、既ニ一四五耗「ロルレンアブスタンド」ニテ感ズレドモ、健康部ハ九五耗「ロルレ

ンアブスタンド」ニ至ラザレバ感受セズ。即チヘッド氏帯ハ健康部ニ比シ五〇耗「ロルレンアブスタンド」ニ相當スル丈ケ過敏ナルヲ知り得。

同様ニ第四圖、心臟瓣膜障得及氣管支炎患兒ニ於テハ三〇耗。第六圖腎臟炎患兒ニ於テモ三〇耗「ロルレンアブ

第六圖 (炎 腎)



スタンド」丈ケ知覺過敏ナルヲ知ル。(第三一六圖參照)。

本法ヲ用フル時ハ小兒ト雖、電導子ノ接觸ニヨル感覺ト、眞ノ感傳電氣個有ノ感覺トハ、明ニ

區別シ得ルヲ以テ、其成績亦精確ナリ。

第三章 諸疾患ニ於ケルヘッド氏帯

ヘッドハ全軀幹ヲ頸部(C)八。胸部(D)十二。腰部(L)五。薦骨部(S)四ニ分チ、各疾病ニ就テ知覺過敏帶ヲ檢出セリ。

(1) 軀幹及ビ四肢

心臟疾患

C₈, D₁₋₁

肺臟疾患

D₁₋₁; 脊 = D₂, D₁₋₅

食道

D₃₋₆, D₈

乳腺

D₁₋₅

胃

D₁₀, D₂₋₉

腸

D₁₀₋₁₂

肝

D₁₋₁₀

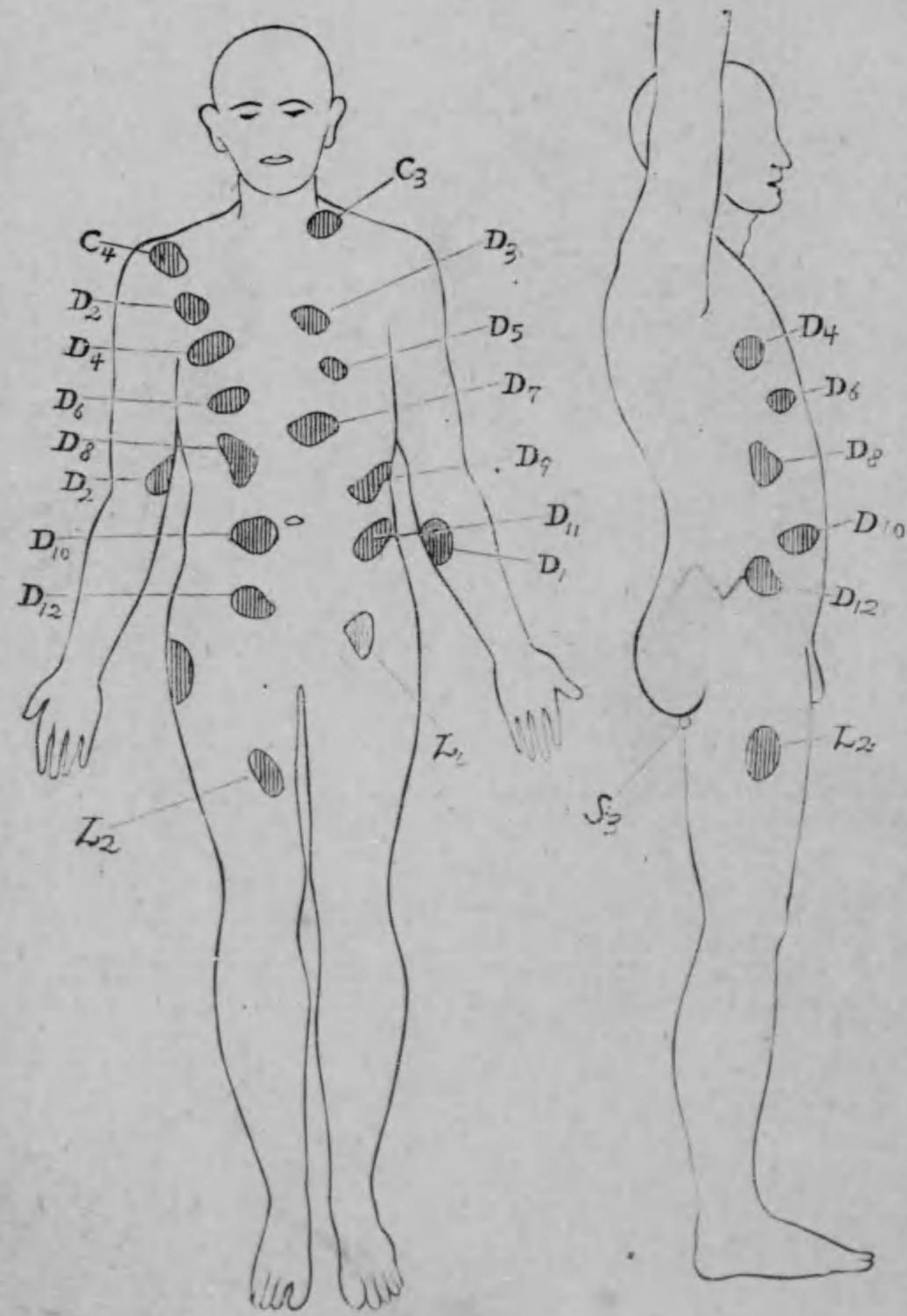
腎及輸尿管

D₁₀₋₁₁, L₁

諸疾患ニ於ケルヘッド氏帯

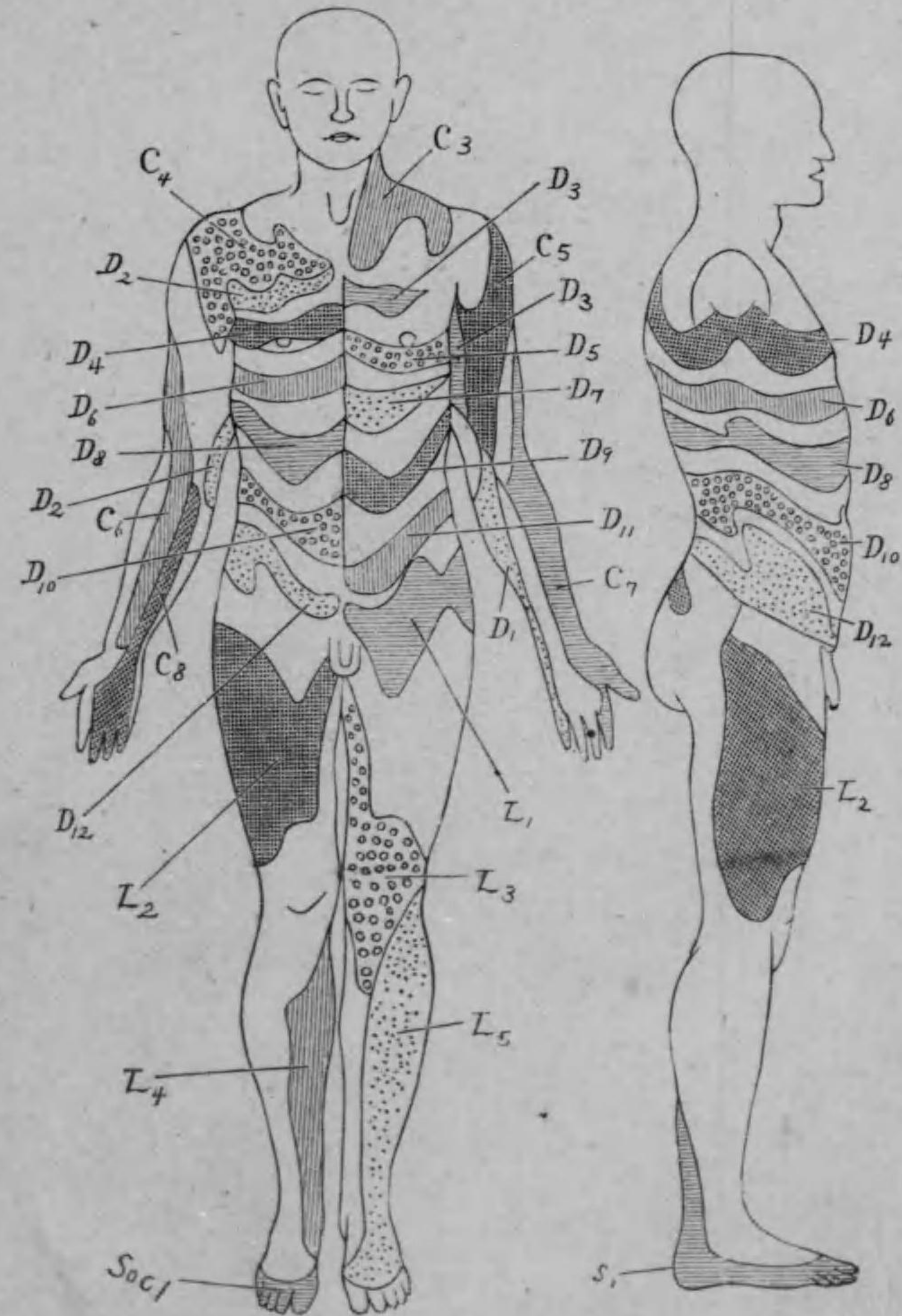
第 八 圖
(最 高 點)

諸疾患ニ於ケルヘッド氏帶



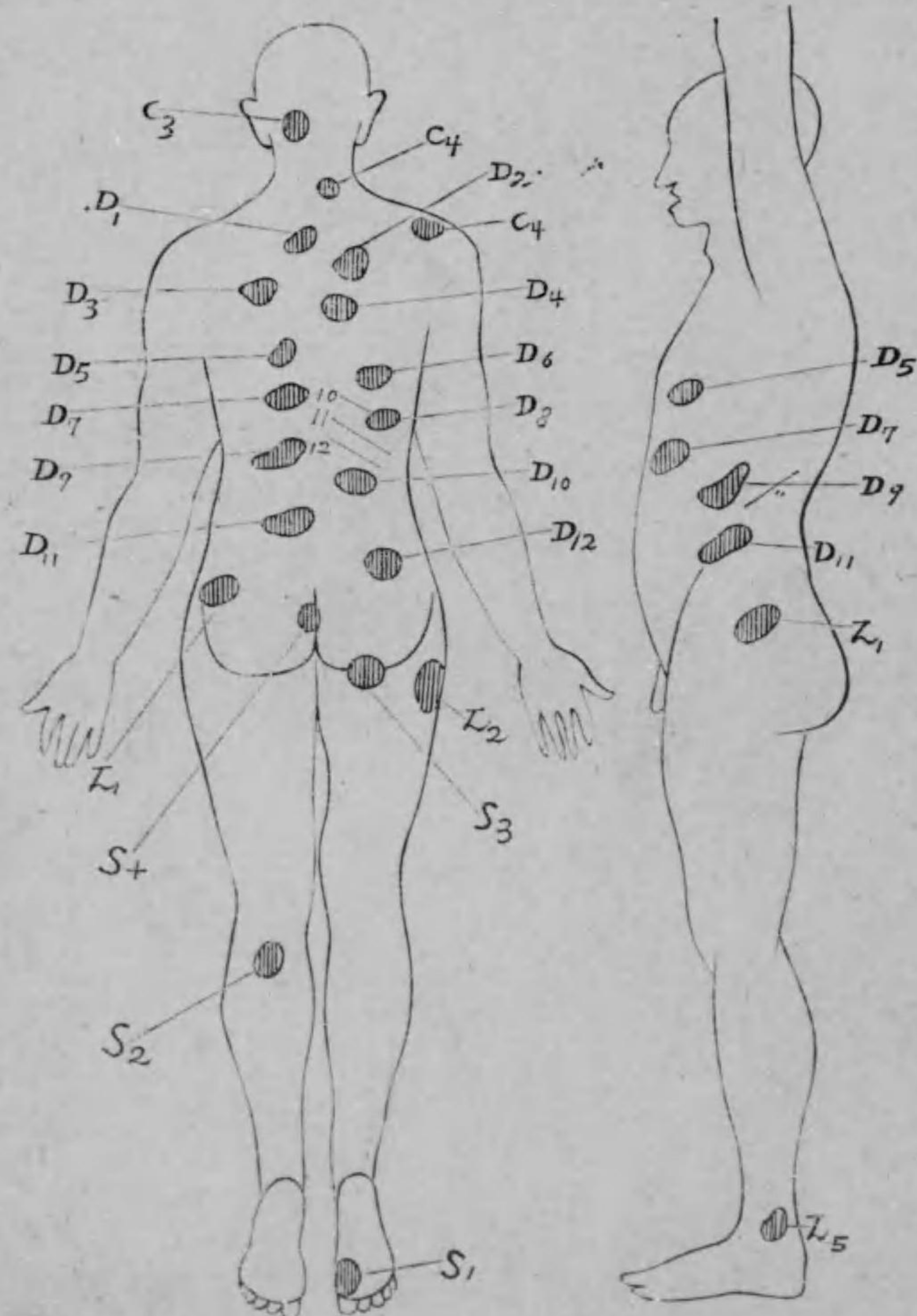
第 七 圖

諸疾患ニ於ケルヘッド氏帶



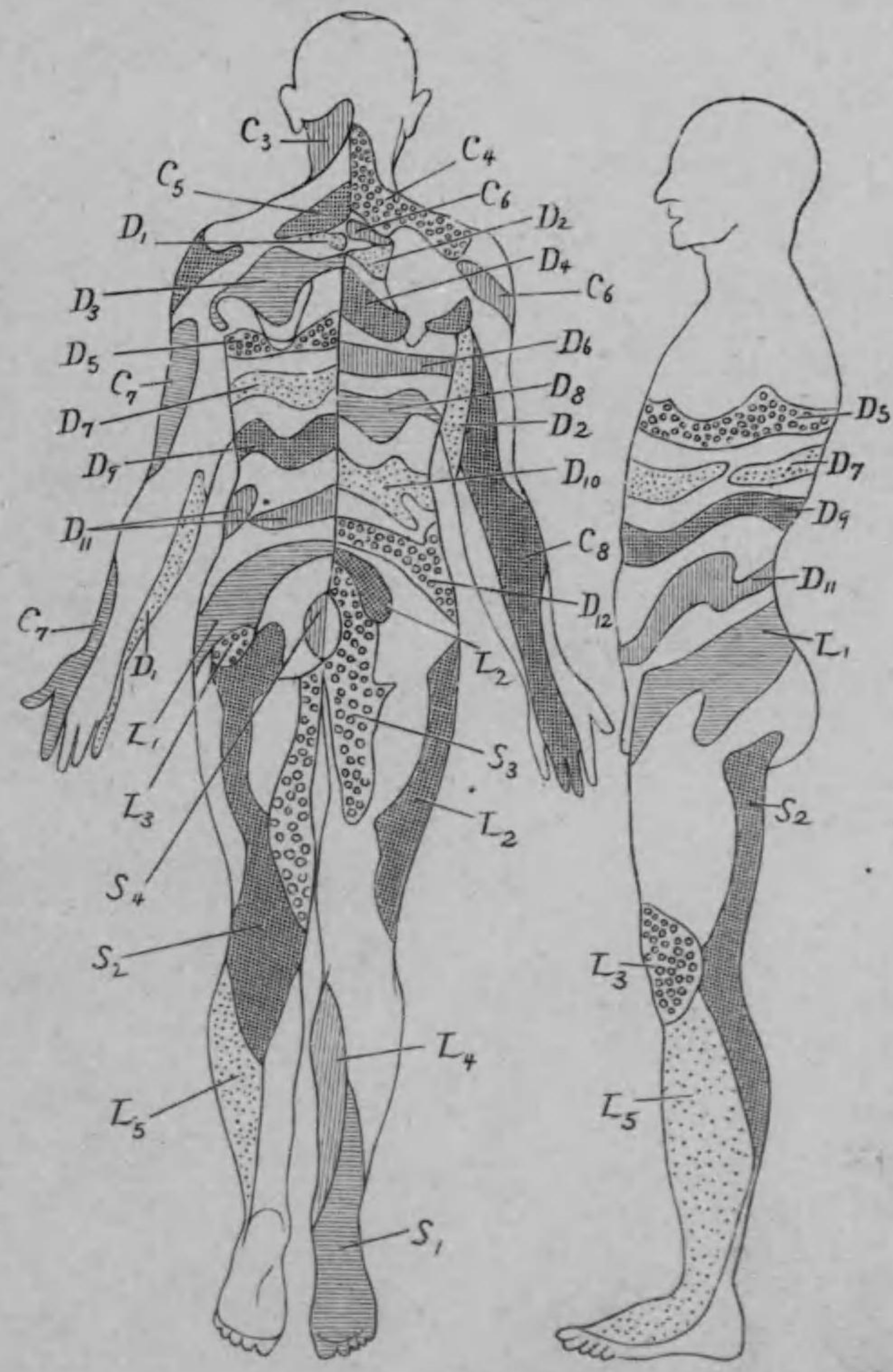
第十圖
(點 高 最)

諸疾患ニ於ケルヘッド氏帶

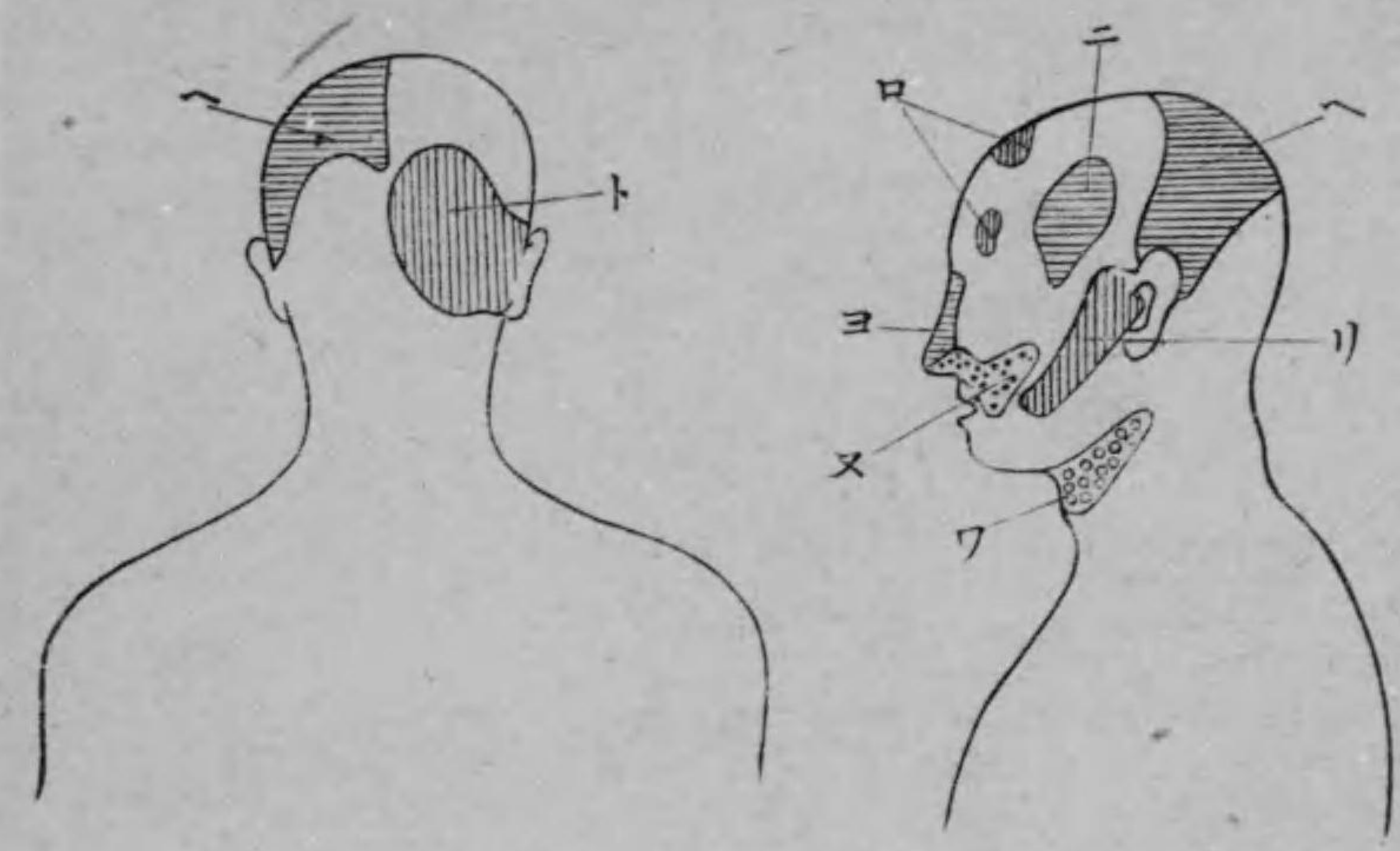


第九圖

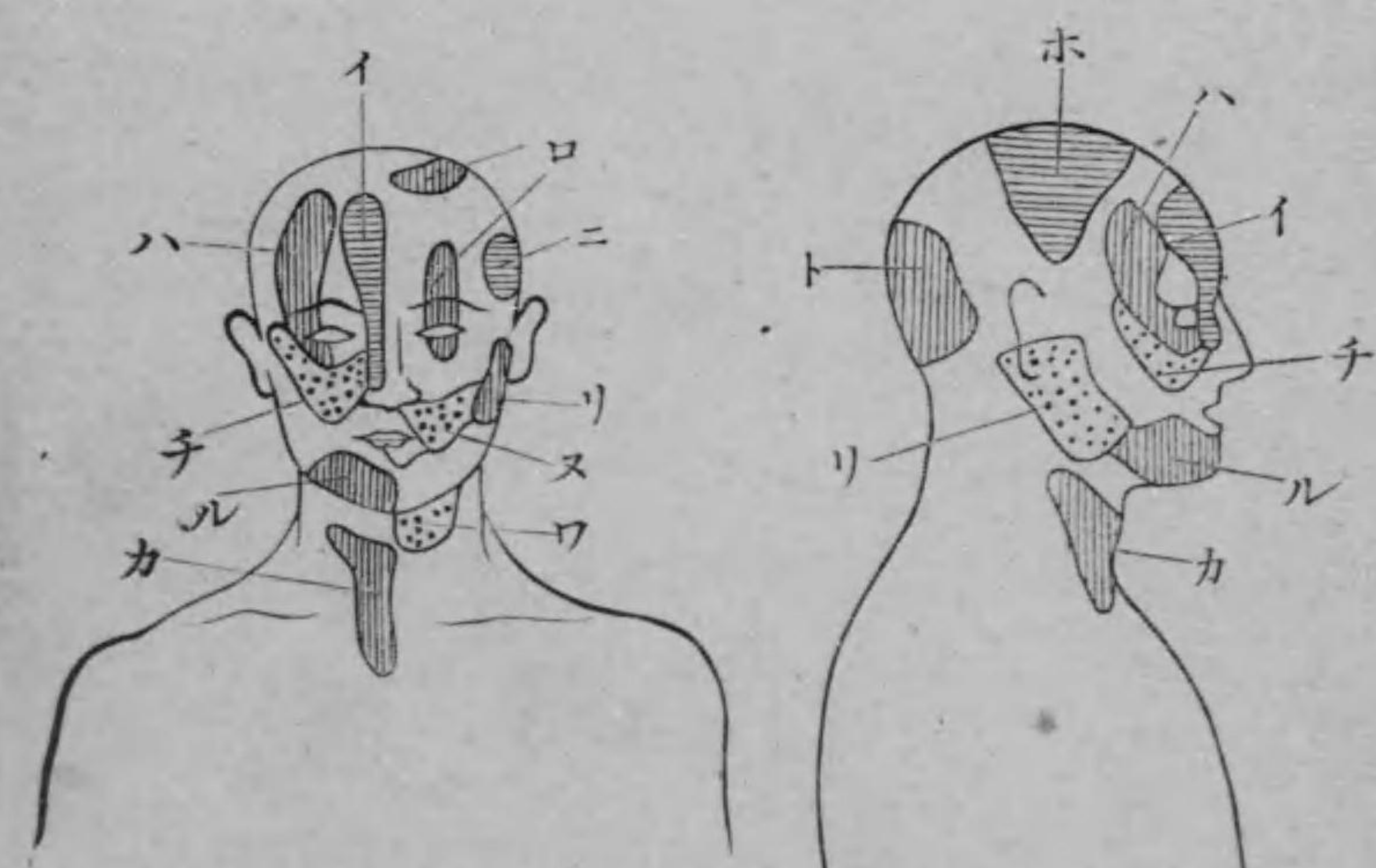
諸疾患ニ於ケルヘッド氏帶



第十圖



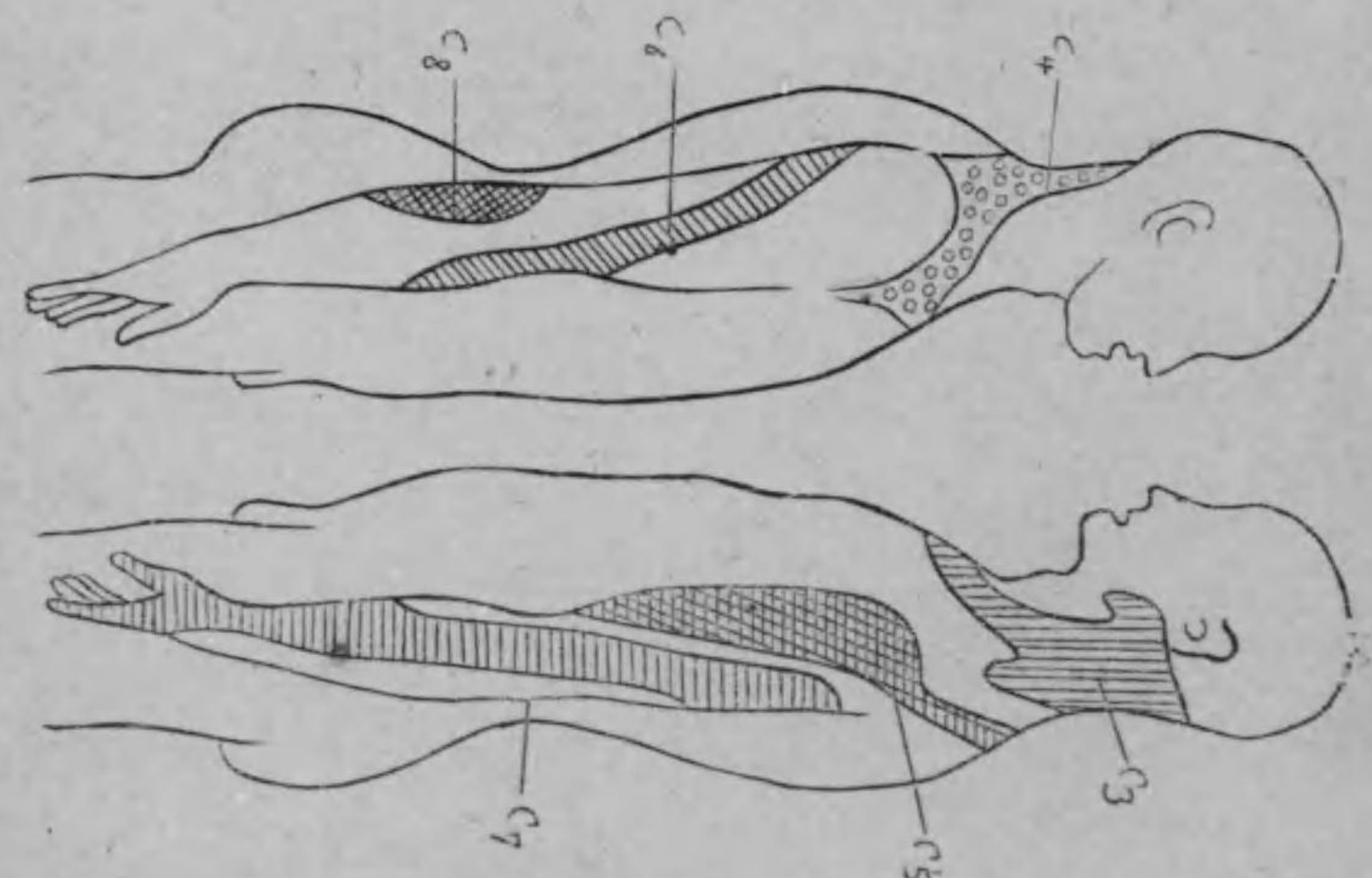
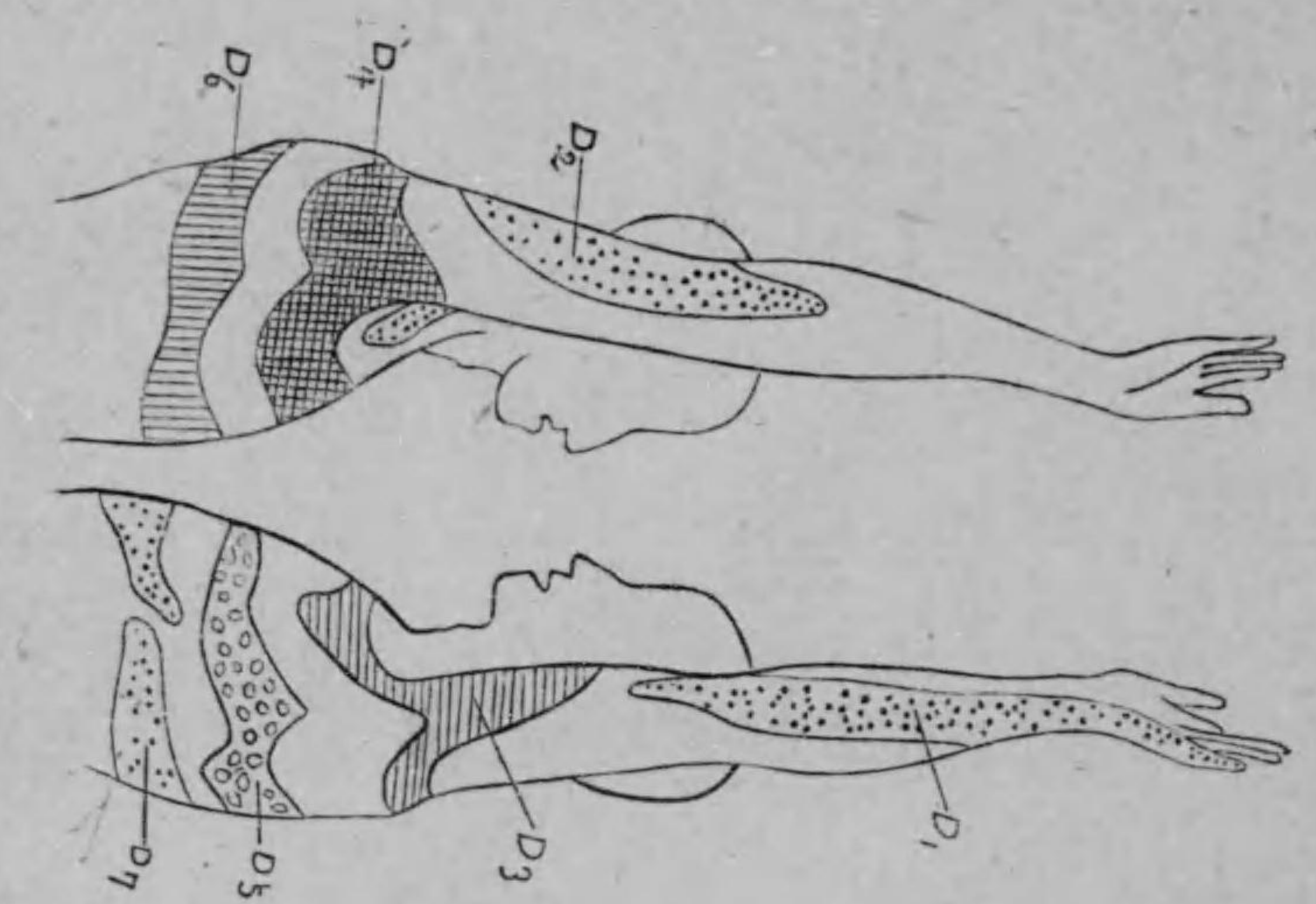
諸疾患ニ於ケルヘッド氏帶



- (イ)鼻前額帶
- (ロ)中部眼窩帶
- (ハ)額前額帶
- (ニ)額額帶
- (ホ)頂天帶
- (ヘ)額頂帶
- (ト)後頭帶
- (チ)上額帶
- (リ)下額帶
- (ヌ)鼻唇帶
- (ル)頤帶
- (ワ)上部咽頭帶
- (カ)下部咽頭帶
- (オ)舌骨帶

一四

諸疾患ニ於ケルヘッド氏帶



第十一圖

一五

諸疾患ニ於ケルヘッド氏帯

膀胱

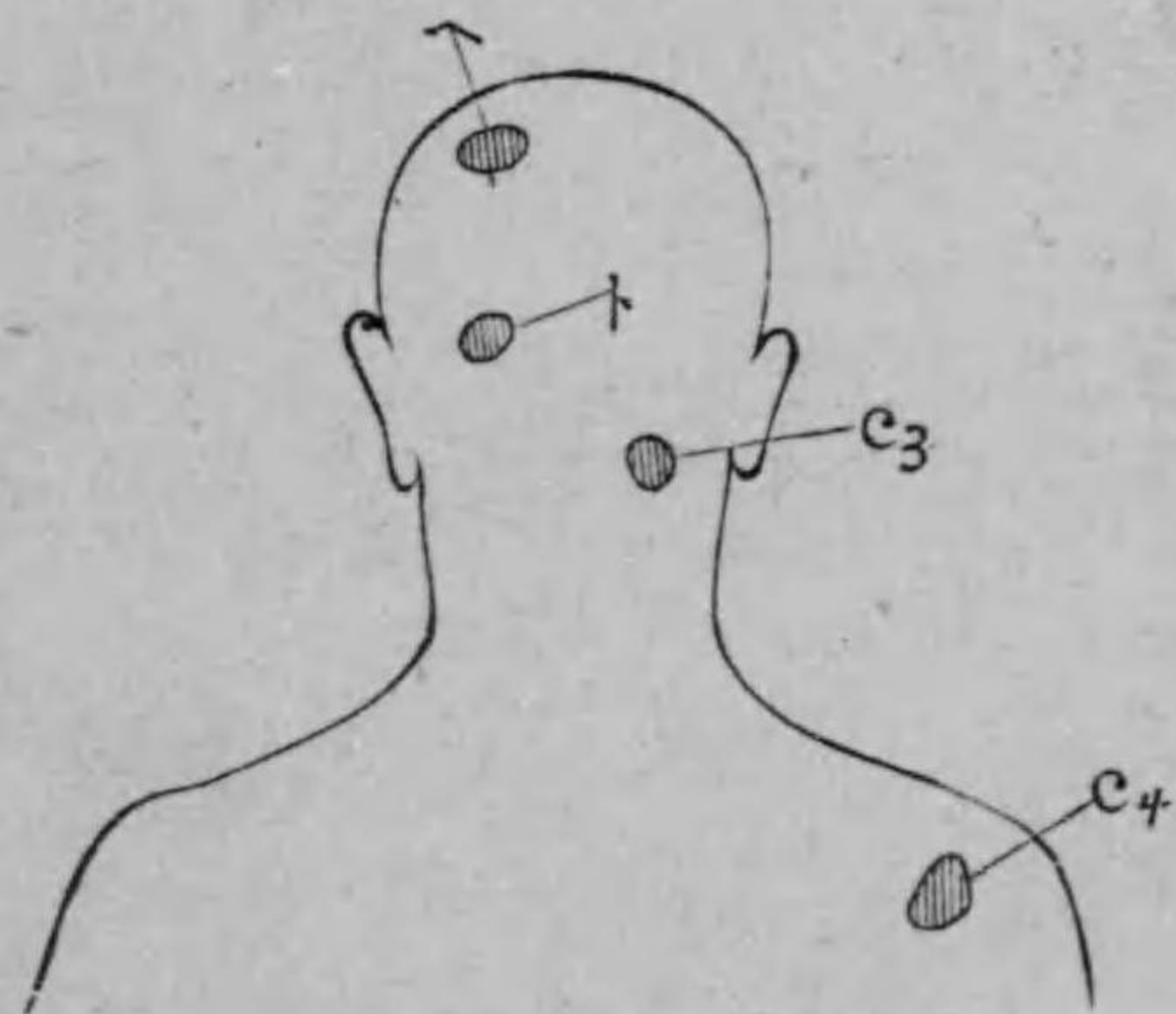
睾丸又ハ卵巢

子宮

子宮口

(2) 頭部及頸部

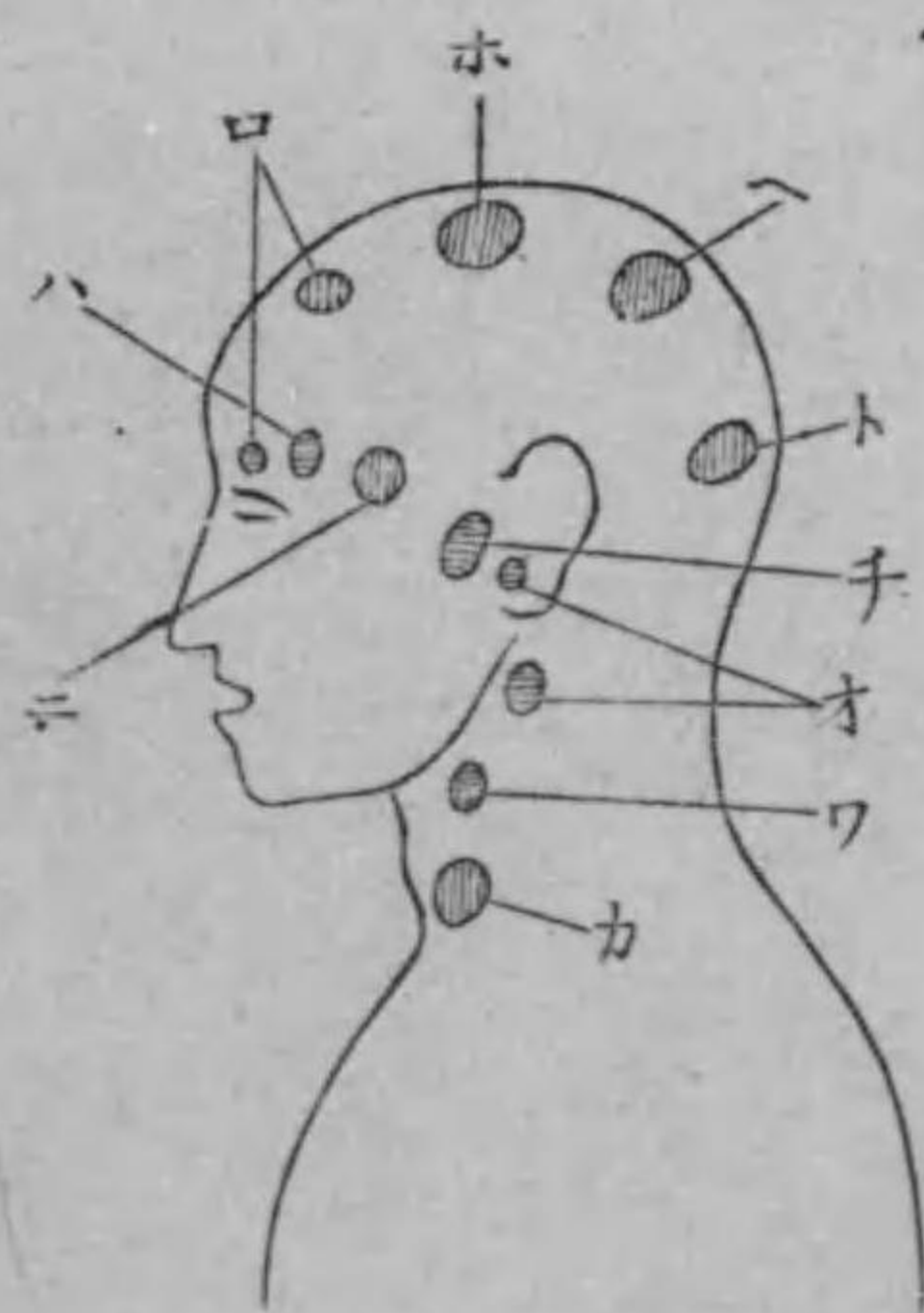
(A) 圖三十第 (點高最)



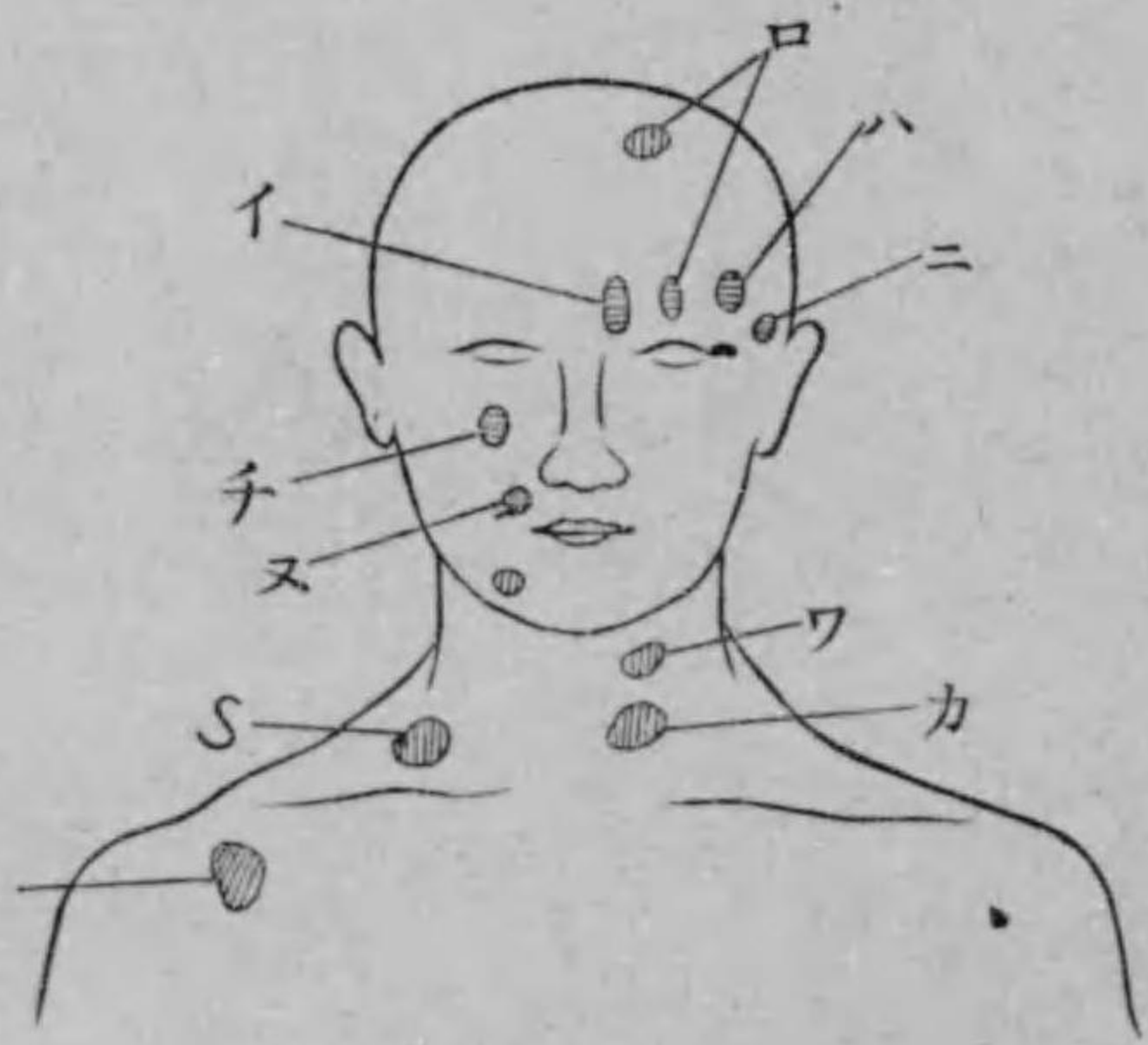
S₂₋₁

D_m

S₁₋₁



(B) 圖三十第 (點高最)



(ヨセ照参ヲ圖二十第ハ解圖)

眼、鼻、上門齒 鼻前額帶 Fronto-

Nasal.

遠視

中部眼窩帶 Mid-

orbital.

耳及ビ心臟

額前額帶 Fronto-

temporal.

綠内障

額帶 Temporal.

中耳疾患

頂天帶 Scheitel.

耳及ビ胃

顛頂帶 Parietal.

後部咽喉及ビ腹部臟器ノ一部 後頭帶 Occipital.

虹彩膜炎及硝子體

上顎帶 Maxillar.

上臼齒

下顎帶 Mandibular.

鼻及齒齦

鼻唇帶 Nasolabial.

舌背及智齒

上部咽喉帶 Superior laryngeal.

門齒及犬齒

頤帶 Mental.

諸疾患ニ於ケルヘッド氏帯

扁桃腺、舌及ビ下側白齒
咽頭

舌骨帯 Hyoid.
下部咽頭帯 Inferior laryngeal.

肋膜疾患ニハ知覺過敏帶ナシ。

時トシテハ知覺過敏帶ガ帶ヲナサズ、唯一點トシテ現ハル、コトアリ、或ハ帶ヲナスモ、或一定點ニ於テ殊ニ著シク過敏ナルコトアリ。ヘッドハ之ヲ最高點 Maximalpunkt ト名ク。此點ハ内臟疾患ノ恢復期ニ最モ長ク存在ス(第八、十、及十三圖)。

ファーベルハ消化器疾患ニ際シ、ヘッド氏帯ノ存在ヲ確メ、且ツ消化器ハ交感神經ノミナラズ、又迷走神經枝ヲ有スルヲ以テ、反射的ニ頭痛ヲ起スモノナリト論ゼリ。

ヘーテルハ臨牀上、診斷確實ナル胃潰瘍ノ十四例ニ於テヘッド氏帯ノ存在ヲ確認シ、且ツ曰ク、乳腺疾患ニハヘッド氏帯ナシ、之レ乳腺ハ胎生學上皮膚ト同ジク、「エクトデルム」 Ektoderm ヨリ生ズルモノナレバ、體表面ノ一部ヨリ他ノ一部ヘ反射的ニ知覺過敏ヲ生ズルコトナシ、加之乳腺ハ脊髓神經ノ分枝ヲ有スルモ、交感神經ヲ含マズ、故ニヘッド氏帯ヲ生ゼズト之ニ對シテバッシュハ交感神經ガ乳腺ノ分泌ニ多大ノ影響ヲ與フルモノナリト論ジ、ヘーテルノ說ヲ駁シ、バルテンスタインハ又、發育セル乳腺ハ交感神經枝ヲ壓シ、反射的知覺過敏ヲ起スモノナリト論定セリ。

バルテンスタインハ四十三人ノ小兒ニ於テ知覺過敏帶ヲ檢シ、ヘッドノ云フ所ト略ボ一致スルヲ報ゼリ。而シテヘッドト同ジク、肋膜疾患ニハヘッド氏帯ナシト云フ、蓋シ、小兒ニ於テ知覺過敏帶ヲ檢セシハ、恐ク氏ヲ以テ嚙矢トス。

マッケンジーハ盲腸炎ノ一症候トシテマック、ブルチー氏點ノ近傍ニ知覺過敏帶アルヲ證明シ、シエルレンモ盲腸炎ノ初期ニ於テ、既ニヘッド氏帯アルヲ報ジ、一旦存在セシヘッド氏帯ガ急ニ消失スルハ穿孔セル證ナリト云ヘリ。ミユルレルモ亦盲腸炎ニヘッド氏帯アルヲ確メ、且ツ一例ニ於テD₃(葦丸ノヘッド氏帯ニ相當ス)ニ知覺過敏帶ヲ證明シ、該患者ガ、先ニ葦丸ニ外傷ヲ受ケシコトアルヲ知ルヲ得タリ。又一例ニ於テハD₁ノ知覺過敏帶ヲ檢出シ、其後幾何ナラズシテ、胃潰瘍ヲ發セルヲ經驗セリ。

ウィルビーハ胃潰瘍ノ際ノヘッド氏帯ヲ研究シ、且ツ胎生學上ヨリ、胃前壁ノ潰瘍ハ體ノ中线ヨリ左側ニ、胃後壁ノ潰瘍ハ、右側ニ、胃小彎ノ潰瘍ハ兩側ニ知覺過敏帶ヲ有スルヲ報ゼシコト、前ニ述ベタルガ如シ。

ビットルフハ腎痛痛ノ一例ニテ其レニ相當スルヘッド氏帯ニ帶狀疱疹ヲ發セルヲ見テ、ヘッドノ說ヲ贊シ、此他數例ニ於テヘッド氏帯ノ存在ヲ確メタリ。次デフランツ、カチラモ亦、ビットルフト同様ノ一症例ヲ報ゼリ。

余モ亦、肝、腎、胃、腸、膀胱、肺及ヒ心臟ノ各疾患ヲ有スル小兒ニ於テ、知覺過敏帶ヲ檢シ、ヘッドノ云フ所ト一致スルヲ認メタリ。就中一例ノ膀胱結石症患兒ハ膝關節ノ屈折面即チS₂ニ著シキ知覺過敏ヲ感ジ、針ヲ以テ輕ク刺スモ、恰カモ鑽ヲ以テ貫カル、ガ如シト云ヒ、針尖ヲ以テ輕ク直線ヲ畫ク時ハ、恰カモ小刀ヲ以テ切ラル、ガ如ク感ズト訴ヘタリシガ、其後、レントゲン装置ニヨリテ明カニ膀胱結石ノ存在ヲ確證スルコトヲ得タリ。又他ノ一例ニ於テハブーバルト氏靱帶ヨリ、マック、ブルチー氏點ノ近傍ニ知覺過敏帶ヲ檢出シ、精シク既往症ヲ尋子シニ、該患兒ハ時々腹痛ニ惱ミ、其都度、必ズ盲腸部ノ疼痛アリト云フ。又種々ノ婦人科の疾患ニ際シテ腰痛ヲ訴ヘ、該部ノ知覺過敏トナルコトアリ。斯ノ如クヘッド氏帯ハ各臟器ニ相當セル或一定部ニ生ズルモノナレバ、之ニヨリテ診斷ヲ容易ナラシムルコトアリ。例ヘバ腹痛ニ際シ、其疼痛ガ腹腔内ノ何レノ臟器ヨリ發スルモノナルヤヲ診斷スルニ、甚ダ有力ナル症狀ト云フヲ得ベシ。

第四章 ヘッド氏帯ノ治療的應用

文獻ニ徴スルニ、ヘッド氏帯ヲ治療上ニ應用セシ例ハ甚ダ少ク、唯ヘッドガ知覺過敏帶ニ「コカ

イン」軟膏ヲ塗布シ、ヘーテルガ芥子軟膏ヲ塗布シテ、效果ヲ收メタリト云フニ過ギズ。

然レドモ、余ノ實驗ニヨレバ、ヘッド氏帯ノ治療的應用ハ決シテ以上唯一二ノミニ止マラズ、古來總テノ醫家ガ、臨牀的ニ應用シツ、アル濕布、冰囊或ハ我邦古來ノ鍼灸術ノ如キモ、亦ヘッド氏帯ノ應用ニ外ナラズ。以下項ヲ分チテ之ヲ詳述スベシ。

第一項 溫度ノ血液分布ニ及ボス影響

冷溫濕布、冰囊或ハ灸ノ作用ヲ述ブルニ先チ、豫メ一般ニ溫度ノ血液分布ニ及ボス影響ニ就テ説カザルベカラズ。攝氏三十四度ノ溫度ハ何等ノ影響ヲ及ボサズ。故ニ之ヲ生理的零點Indifferent Punktト稱ス。

體表面ノ一部分ニ攝氏三十三度以下ノ低溫ガ作用スルトキハ、體表面ノ血管ハ收縮シ、血液ハ體ノ内部ニ集マル、此際末梢血管ノ血壓ハ上昇シ、脈搏ハ減少ス。

之ニ反シテ、體表面ノ一部ニ攝氏三十五度乃至四十度ノ溫熱ガ作用スレバ、末梢部ニ充血ヲ來シ、體内部ノ血量減ズ。而シテ血壓ハ下降シ、脈搏ハ頻數トナル。

若シ四十一度以上ノ溫熱ガ作用スル時ハ、血壓上昇シ、脈搏モ亦増加ス。此際ニ於テハ溫覺ノ外、又同時ニ痛覺ヲ伴フヲ以テ、血液分布状態ハ恰カモ三十三度以下ノ低溫ガ作用セル時ニ同ジ。

冷水ヲ攝取セシメテ、體内部ノ一部分タル胃粘膜ヲ冷却スル時ハ、四肢ノ容積曲線ハ上昇シ、反對ニ熱湯ヲ飲マシムル時ハ曲線下降ス。即チ體内部ノ冷却ニヨリテハ、内部ノ血量減少シ、體表面ニ於テハ反對ニ血量増加スルモノナリ。

即チ末梢部ト體内部ノ血管トハ、或溫度ノ作用ニ對シ、全ク反對ニ反應ス。之ヲダストル、モラード氏反動作用説ト稱ス。

斯ノ如ク體表面ノ一部ニ冷水ヲ作用セシムレバ、末梢血管收縮シ、之ニ依テ生ゼル抵抗ニ打ち勝ツベク、心臟ハ、ヨリ多ク働カザルベカラズ。故ニ重症ノ心臟病患者ニハ冷水浴ヲ禁忌トス。虚脱ニ陥ル懼レアルヲ以テナリ。但シ心臟ノ病的變化ノ程度ガ未ダ著シカラズシテ、所謂、心臟ノ修練ヲ要スル時期ニ於テハ却テ有效ナルコトアリ。即チ冷浴ヲ施セバ、心搏動數ハ減少シ、同時ニ心收縮ハ旺盛トナル。而シテ心搏動減少スルトキハ、主トシテ舒張期延長スルヲ以テ、冠狀動脈ノ血量多ク、從ツテ心臟自個ノ榮養ハ佳良トナリ心臟疾患ニ對シ有效ナリ。一般ニ心臟ガ既ニ代償機能ヲ有セザル時ハ、冷水浴ハ之ヲ應用スルヲ得ズ。

冷水浴ヲ施スモ、血壓上昇セザルハ、心臟ガ刺戟ニ應ズル能ハザルモノニテ、心機能不全ノ證ナリ、故ニ之ヲ以テ心機能ノ如何ヲ診斷スルコトヲ得。

卒中ノ懼アル人ハ冷水浴及ビ四十一度以上ノ熱湯浴ヲ禁ズ。若シ斯カル熱湯浴ニ際シテハ、

豫メ熱湯ヲ頭部ニ注ギ、然後、入浴スル時ハ卒中ヲ防ギ得ト云フ。蓋シ初メ頭部ニ熱湯ヲ注グコトニヨリ、血管ノ鍛練ヲナスコト、恰カモ、冷水摩擦ノ感冒ニ於ケルガ如クナラン。

此他血管脆弱ナル者及ビ腸出血ノ懼アル者ニハ冷浴ヲ行ハザルヲヨシトス。

第二項 溫度ノ深部ニ及ボス作用

體ノ或一部ニ溫度ガ作用スル時ハ、當該局部ノ深部ニモ、其溫度ハ傳達セラレザルベカラズ。ウァンターニツツハ膿胸患者ノ肋膜腔内ニ寒暖計ヲ插入シ、胸壁ヲ冰ヲ以テ冷却セシニ、三十分後ニハ一・五度下降シ、一時間後ニハ三度冷却セルヲ實驗セリ。

ジルヴァガ犬ニ行ヘル實驗ニヨレバ、冰囊ヲ胸壁ニアツルコト、四十八分ノ後、心臟ノ前壁ノ溫度ハ三・五度。流レツ、アル心臟内ノ血温ハ〇・三七度下降セリト云フ。

ハインツハ健康ナル犬ニテ、十度ノ濕コンプレッセヲ施セバ、肋膜内ノ溫度ハ著シク冷却セラル、ヲ見、且ツ氏ハ冷濕布ハ乾燥セル冷刺戟ヨリモ深達作用大ナルヲ發見セリ。

リーゲルハ冰囊ヲ胸及ビ腹部ニ置キシニ、直腸ノ溫度ハ、〇・五乃至一・四五度下降シ、腋窩ノ溫度ハ〇・二乃至〇・五度下降セリ。

ハグスビールハ肛門内及腹腔内ニ檢溫器ヲ插入シ、左腹部ヲ冰ヲ以テ一時間冷却セシニ腹腔ノ溫度ハ一・七五度。直腸ニテハ〇・四度下降セリ。而シテ冰ヲ取去リシ後、八十分ニシテ常

温ニ復セリ。

ビンツハ壁側腹膜ノ温度ハ下降スルモ、腹腔ノ温度ハ低下セズト云フ。
シユルツエハ檢温器ヲ腹部ノ種々ノ深サノ處ニ挿入シ、試驗動物ヲ屠リテ其深サヲ精密ニ測定セリ、其ノ結果ハ左ノ如シ。

深サ	冷却時間	下降温度
牛糞	二〇分	一〇度以上
二種	二〇分	二度
六種四分ノ三	二〇分	〇・二一〇・四度
直腸ニテ	二〇分	〇・二度

フォン、シユリコフハ精密ナル實驗ニヨリ左ノ結論ヲ得タリ。

検査部位	冷却時間	深サ	下降温度	試験法
口腔	六〇分	〇・九種	五・一度	頰部ヲ冷却
掌	六〇分	二・五	五・八	手甲ヲ冷却
肋膜	六〇分	三・〇	三・七	臍胸患者ノ胸壁冷却

腸	三〇分	四・〇	〇・七五	腸管アル患者ノ腹壁冷却
腫	九〇分 <td>七・〇 <td>〇・八 <th>下腹部冷却</th> </td></td>	七・〇 <td>〇・八 <th>下腹部冷却</th> </td>	〇・八 <th>下腹部冷却</th>	下腹部冷却
下腿ノ瘻管	八〇分	四・〇 <td>〇・六</td> <th>下腿冷却</th>	〇・六	下腿冷却
胃部ニテ	三〇分	—	三・一	十度ノ冷水注射
胃部ニテ	二五分	—	二・一	八度ノ冷水飲下

サロモン及ビクンケハ瘻管ニテ熱「コンプレッセ」ヲ施セバ、一時間後ニハ、一乃至二種ノ深部ニテ一・二度、三乃至四種ノ深部ニテハ〇・四度上昇スト云フ。

ウエンドリチルハ熱湯ヲ通セル管ヲ腹部ニアテ、百分時ノ後、胃ノ温度ガ〇・四上昇セルヲ實驗セリ。

リールハ胃部ヲ冰囊ヲ以テ冷却シ、胃及ビ直腸ノ温度ヲ測定セシニ、左表ニ示セルガ如キ温度ノ下降ヲ見タリ。

姓名	體量	冷却前ノ胃ノ温度	冷却前ノ直腸温度	冷却後ノ胃ノ温度	冷却後ノ直腸温度	冷却時間	胃ノ下降温度	腸ノ下降温度
H	五三・五	三七・九	三七・九	三七・二	三七・六	七〇分	〇・七	〇・三
W	五二・五	三七・六	三八・一	三六・七	三七・二	一四五	〇・九	〇・九
A	五九・〇	三七・六	三八・〇	三六・八	三七・四	一一〇	〇・八	〇・六

O	L	S	M	B	N	L
七八・〇	六九・五	三九・五	四〇・〇	六六・一	七一・五	四七・〇
三七・四	三七・六	三七・五	三七・七	三七・七	三六・九	三七・九
三七・三	三七・六	三七・四	三七・四	三七・八	三七・〇	三八・二
三五・七	三六・八	三五・七	三六・〇	三六・四	三六・四	三六・六
三六・八	三七・二	三六・七	三六・八	三六・七	三七・〇	三七・二
八五	九〇	一〇〇	一一〇	六〇	七五	九〇分
一・七	〇・八	一・八	一・七	一・三	〇・五	一・三
〇・五	〇・四	〇・七	〇・六	一・一	〇	一・〇

要之、或一部ニ溫度ガ作用スル時ハ、又局處の深達作用ヲ呈スルハ疑ナキ所ナリト雖、然レドモ、此際一定ノ稍、長キ時間ヲ要スルコトヲ注意セザルベカラズ。

第三項 腦及ビ腦膜疾患患者ノ頭部冷却

腦膜炎或ハ腦症狀ヲ呈セル患者ニアリテハ、頭部ノ充血ヲ防ガンガ爲メニ、古來醫家ハ冰囊、冰枕或ハライテル氏裝置ニヨリテ、頭部ヲ冷却スルヲ常法トス。

然レドモウ・クレンルノ實驗ニヨレバ、頭部ノ皮膚ヲ冷却スレバ、腦ノ容積増加ス。グラムゼルガ四例ノ頭蓋骨缺損ヲ有スル患者ニテ描ケル腦壓曲線ヲ見ルモ、冷水ニヨリテ腦壓上昇シ、耳ノ容積ハ減少セリ。且ツ曰ク、冷水ヲ作用セシメズトモ、衣服ヲ取り去リ、冷キ空氣ニ觸

レシムルモ同様ナリト、オー、ミユルレル及ビジ・ベックハ冷浴ニヨリ腦血管擴張シ、腦脊髓壓ハ上昇スルヲ實驗シ、クルシュマンモ亦、腰椎穿刺ニ當リ、腦脊髓液ガ化膿性ニシテ、稠厚ナル時ハ、足部ヲ冷却スルコトニヨリ、容易ニ腦脊髓液ヲ流出セシメ得ベキヲ報ジ、加之、咳嗽、號泣等ヨリモ、腦脊髓壓ヲ高ムルニハ足部ノ冷却ガ有效ナリト云ヘリ。

シユルレル、ウエルトハイメル、ミユラー等モ亦、末梢部ノ冷却ニヨリテ腦血管ノ充血ヲ惹起スルモノナルヲ報ゼリ。

以上ノ實驗成績ニヨレバ、吾人ガ治療ノ目的ヲ以テ施セル頭部冷却法ハ、却テ腦壓ヲ高メ、豫後ヲ不良ナラシムベキ理ナリ。

茲ニ於テ、余ハ實際腦膜炎或ハ腦膜症候ヲ呈セル患者ニ於テ、冰囊或ハライテル氏裝置ニヨリテ頭部ヲ冷却シ、腦脊髓壓ニ對シ如何ナル影響ヲ來スモノナルカラ、腰椎穿刺法ニヨリテ測定セシニ、腦脊髓壓ハ下降スルカ、或ハ不變ノ狀態ニアリ。少クトモ決シテ上昇スルコトナカリキ。今一二ノ例ヲ舉ゲレバ、生後七ヶ月 結核性腦髓膜患兒ニ於テ頭部冷却ヲ行フコト五分ノ後ニハ、其腦脊髓壓ハ三九〇耗水壓ヨリ下リテ三五〇耗ニ減少セリ。又他ノ患兒ニ於テハ、三分間ノ頭部冷却ニヨリ三一〇耗水壓ヨリ二九〇耗水壓ニ下降セリ。此際試ミニ足部ヲ冷却セシニ健康者ト同ジク腦脊髓壓ハ即座ニ二〇耗水壓上昇セリ。

患者姓名	診 斷	腦脊髄壓	頭部冷却後 腦脊髄壓 下降度	冷却 時間	摘 要
1 西○タ○	板狀結核性腦膜炎	一五〇耗水壓	一五〇	五分	足部ヲ冷却セシニ一〇上昇
2 瀨○俊○	「メニンギスムス」	三一〇	二九〇	三分	足部冷却ニヨリ二〇上昇
3 伊○種○	結核性腦膜炎	三九〇	三五〇	五分	
4 馬○都○	同	一八四	四〇	五分	
5 中○花○	同	一九二	一八四	六分	
6 泉○花○	腦 實 質 炎	一七五	一八〇	八分	
			不變	五分	呻吟及搐搦アリ

斯ノ如ク足部ノ冷却ハ全クダストルーモラト説ニ一致シテ腦壓ヲ上昇セシムルニ拘
 腦膜炎患者ノ頭部冷却ガ腦壓ヲ下降セシメ、治療的效果ヲ呈スルハ何故ナルベキカ。

或ハ云ハン、頭部冷却ニヨル局處の深達作用ナリト。サレド既ニ前述セル如ク、深達作用ニハ
 夫々一定ノ稍、長キ時間ヲ要シ、冷却後僅カニ數分以内ニ斯カル結果ヲ來スコトハ到底不可
 能ノ事ニ屬ス。必ズヤ神經ヲ介シテ行ハル、反射作用ニ外ナラザルベシ。

腦膜或ハ腦實質疾患ニ於テハ、患者ノ意識障礙セラル、ヲ以テ、未ダ知覺過敏帶ヲ證明スル
 コト能ハザレドモ、血液分布ノ状態ヲ研究スルニ當リ、多クノ學者ハ頭部ノ皮膚ヲ冷却スレ
 バ、腦内部ノ血管ハ反射のニ直チニ擴張シ、溫熱ガ作用スルトキハ、反對ニ收縮スルヲ認メタ

リ。即チ頭部ノ皮膚ト腦内部トハ、一定ノ神經ニヨリ密接ノ關係アルハ、疑フベカラザル事實
 ナリトス。

腦膜或ハ腦疾患患者ニ頭部冷却法ガ有效ナルハ、全クヘッド氏帶ノ一治療的應用ニ外ナラ
 ズ。故ニヘッド氏帶ニ相當セザル部例ヘバ足部ヲ冷却スルモ、決シテ好果ヲ收ムルコトナキ
 ハ勿論、爲メニ腦壓ヲ上昇セシメ、却テ症狀ヲ増悪セシムルモノナリ。

次ニ述ブルガ如キ麻疹ノ例ハ、能ク腦疾患トヘッド氏帶トノ關係ヲ示スモノト云フベシ。即
 チビルケーノ説ニ從ヘバ、麻疹ハ一種ノ過敏性反應(Anaphylaxie)ニシテ、麻疹ノ潜伏期トハ
 從來諸家ガ思考セル如ク、病原菌ガ體内ニ侵入シテ、繁殖スル迄ノ時間ト云フヨリモ、寧ろ病
 原体ノ體内侵入ニヨリ、體内ニ一種ノ抗體即チ「エルギン」ヲ生ズル迄ノ期間ナリトスルヲ正
 當ナリトス。而シテ麻疹ノ臨牀的症狀ハ此「エルギン」ト病原體トノ結合ニヨリテ生ゼル「ア
 ボトキシシ」ノ作用ニ外ナラズ。即チ「アボトキシシ」ガ神經中樞ニ働ケバ熱發シ、皮膚或ハ粘
 膜ヲ侵セバ發疹或ハ内疹ヲ生ズ。

而シテ麻疹ニ際シテハ、譬へ、熱發アリトモ、冰囊或ハ冷水ヲ用ヒテ冷却スル時ハ所謂麻疹ノ
 内攻ヲ起スコトアルハ、既ニ經驗上、汎ク人ノ知ル所ナリ。加之、冷風ニ當ツルコトスラモ亦
 避クベキコトニシテ、衣服ヲ厚クシテ、能ク溫暖ニ保ツヲヨシトス。斯ノ如ク麻疹ニ對シテ皮

膚冷却ガ禁忌タル理由ハ、ビルケーノ説ト、ダストル、モラートノ定則トニヨリテ、明カニ之ヲ説明スルコトヲ得。即チ體表面ヲ冷却スル時ハ、體表面ノ血管ハ收縮シ、血液ハ内臓及ビ腦ニ向ツテ集マリ、内部ノ毛細管内ニハ「アボトキシシ」蓄積シ、此處ニ障礙ヲ惹起シ、所謂麻疹ノ内攻ヲ起スモノナリ。

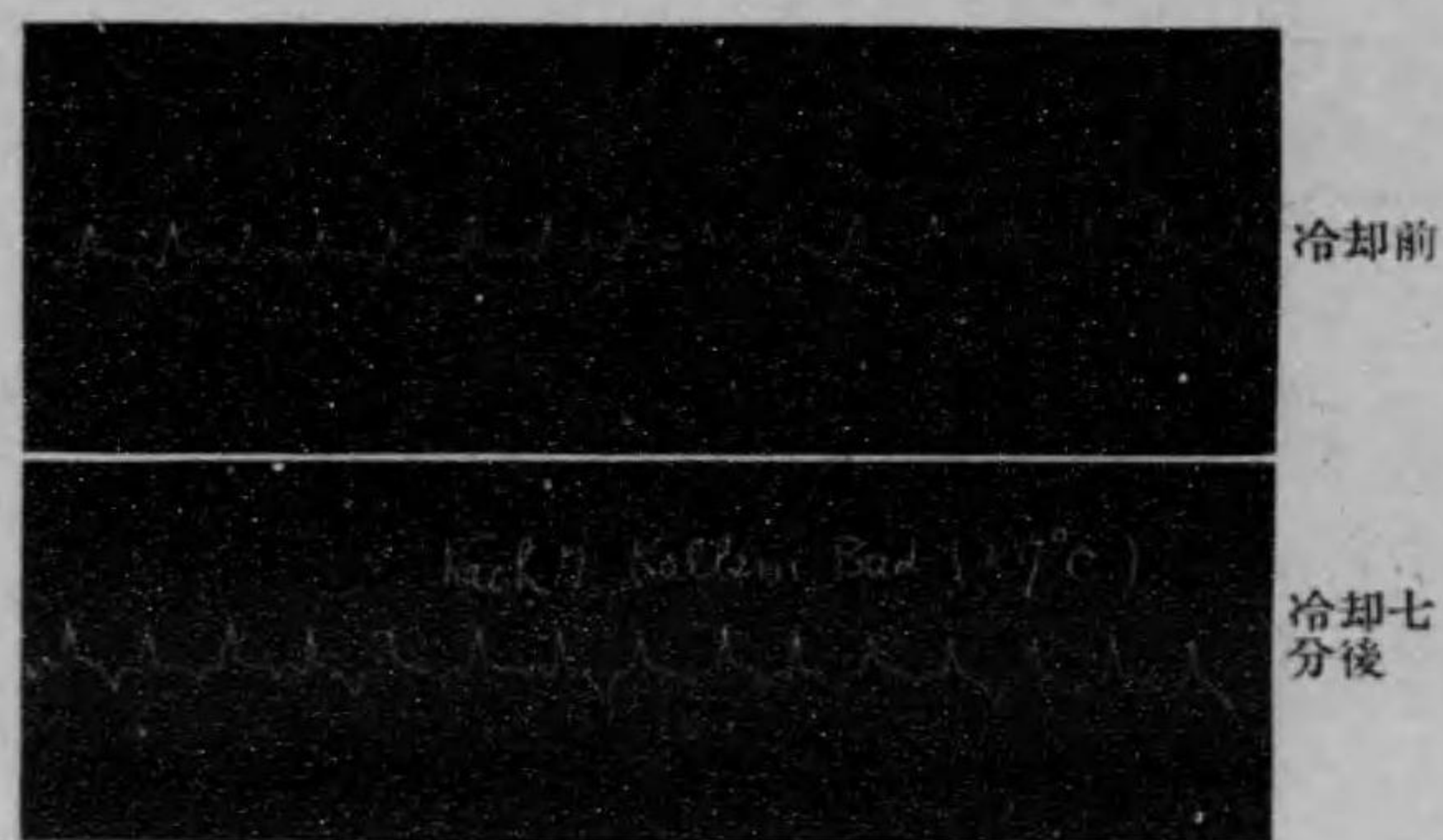
然レドモ一旦「アボトキシシ」ガ腦血管ニ集マリテ、腦性麻痺ヲ起セル時ニ於テハ、他ノ腦疾患ノ際ト同ジク、頭部冷却法ハ良好ナル效果ヲ現ハスモノナリ。之レ腦ガ侵サレタル時ハ、ソレニ相當シテヘッド氏帯ヲ生ジ、此ヘッド氏帯ヲ冷却スル時ハ腦症狀ニ對シテ好果ヲ來スモノト云ハザルベカラズ。

要之、麻疹ニ對シテハ皮膚ノ冷却ハ禁忌タレドモ、一旦内攻ニヨリ、例ヘバ、腦症狀ヲ惹起セルモノニアリテハ、頭部ノ冷却法ハ善良ナル結果ヲ生ズルモノナリ。之レヘッド氏帯ノ治療的應用ニ基因ス。

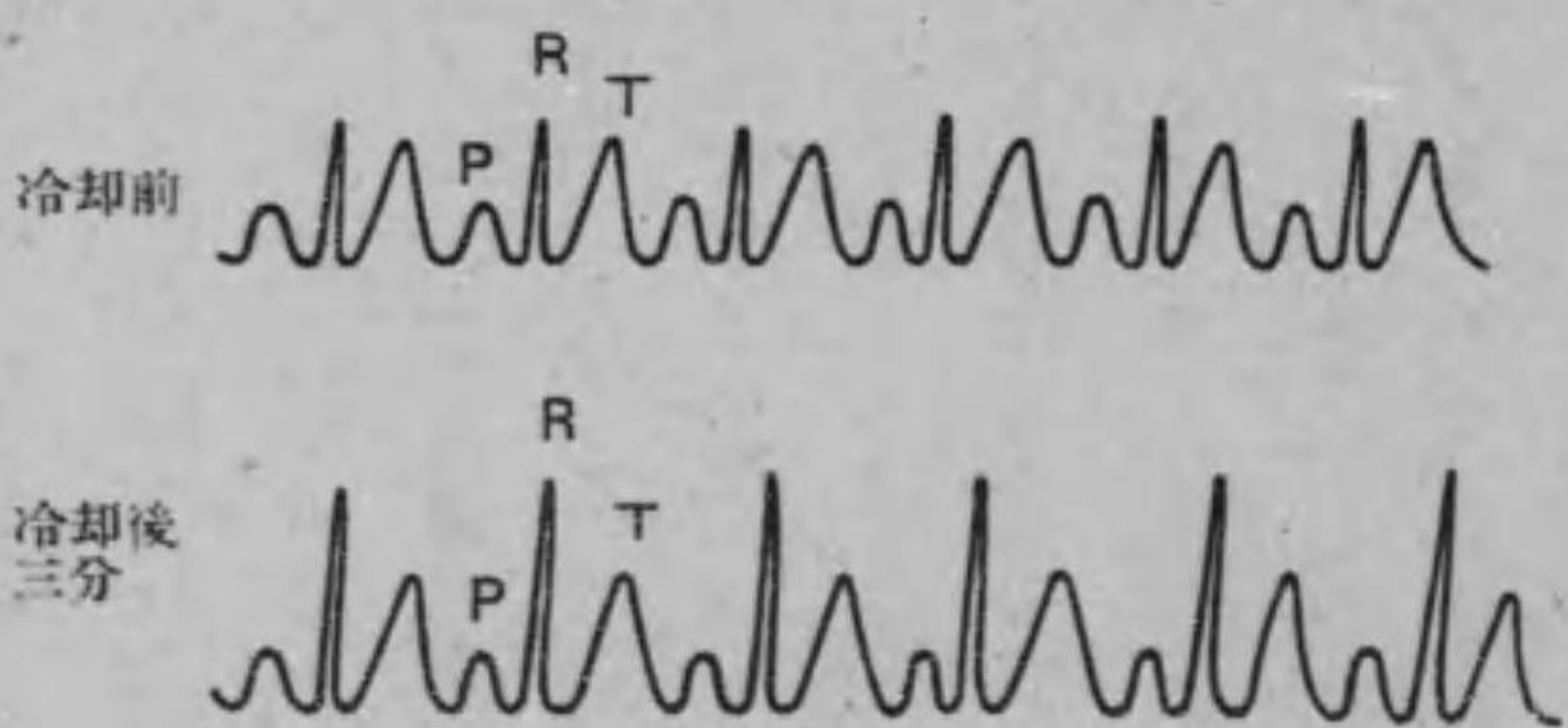
第四項 心臟病患者ノ胸部冷却

心臟病患者ノ心悸亢進ヲ沈靜センガ爲メニ胸部ヲ冰囊ヲ以テ冷却スルハ古來醫家ノ用フル療法ナリトス。サレドダストル、モラートノ定則ニヨレバ、體表面ノ一部ニ低溫ヲ作用セシムレバ、末梢部ノ血管ハ收縮シ、心臟ハ其抵抗ニ打勝ツベク、ヨリ多ク働カザルベカラズ。故

第十圖



第十圖



シテ胸部冷却ガ心臟ノ收縮ニ如何ナル結果ヲ來スモノナルカヲ知ランガ爲メニ心尖搏動曲線描畫法ヲ應用セリ。

先ヅ足部ニ冷濕布又ハ冷水浴ヲ施セシニ心尖搏動ハ冷却前ヨリモ強大トナリ、曲線ノ高サハ増大セリ(第十四圖)。尙心臟ノ

働カザラシムカ
働作電流ヲ測定セシニ、大腿部ヲ冰囊ヲ以テ冷却スルコト、三分ノ後ニハR突起増大セリ(第

十五圖之ニヨレバダストルーモラートノ定則ノ如ク、下肢ノ一部ヲ冷却スル時ハ心臟ノ搏

動ハ強大トナルモノナリ。

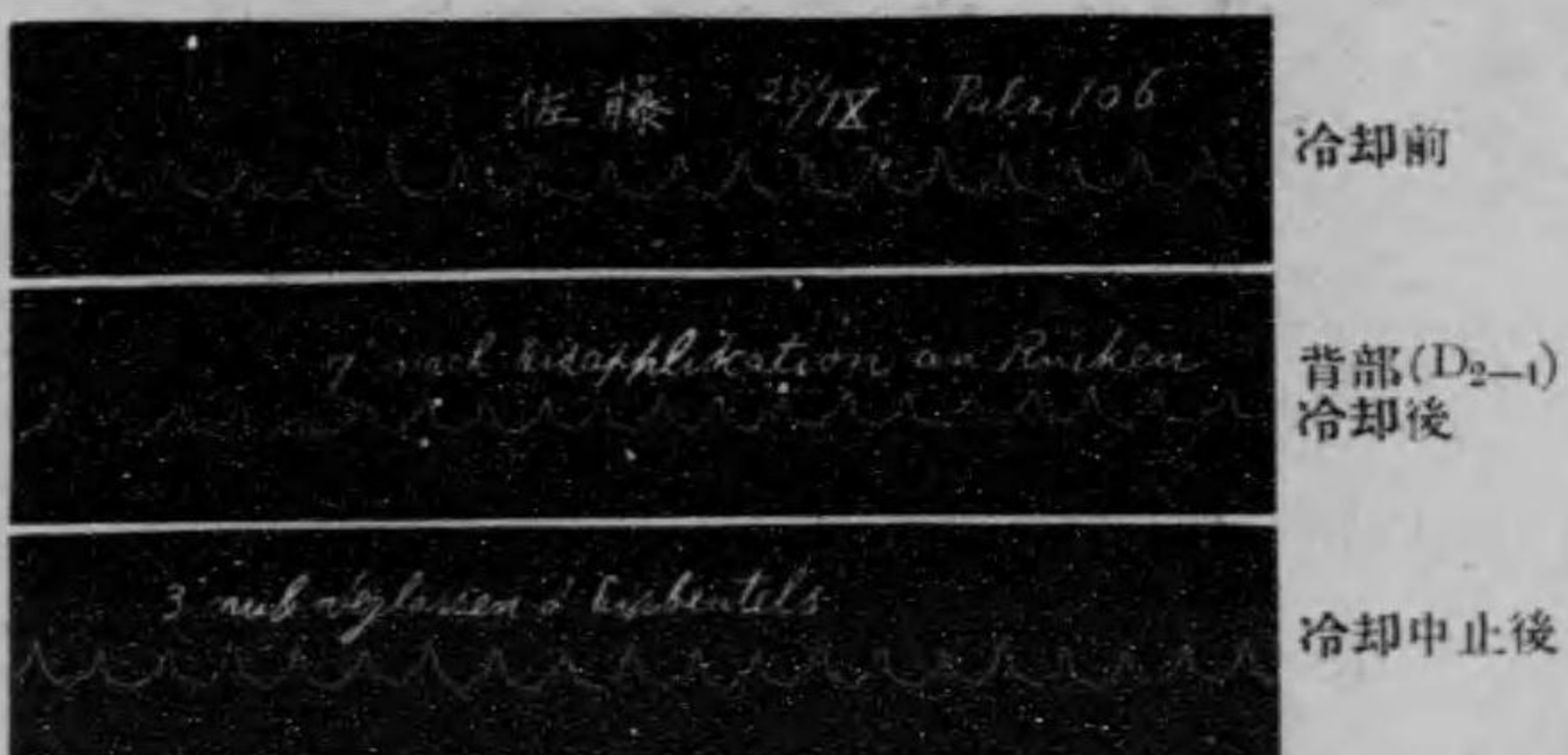
然ルニ心臟ノ所謂ヘッド氏帯ニ相當スル部分ヲ冷却スル時ハ第十六圖ニ於テ見ルガ如ク、曲線ハ却テ其高サヲ減ゼリ、即チ心臟ハ冷却後二分以内ニ既ニ幾分沈靜ニセラレタリ。

同ジク軀幹ニテモ心臟ノヘッド氏帯ナラザル部分例ヘバ腹部ヲ冷却スルモ、決シテ斯カル現象ヲ見ルコトナシ、即チ心部冷却ハ心臟病患者ノ心臟ヲ安靜ナラシムル作用ヲ有ス。

此作用ハヘッド氏帯ノ治療的應用ニ外ナラザルヲ以テ、必ズシモ、心部ヲ直接ニ冷却スルヲ要セズ。若シ患者ガ冰囊ノ重量ノ爲メニ、苦痛ヲ訴フル時ハ、成ル可ク遠隔ナル部位ニ於ケルヘッド氏帯ヲ冷却スルヲヨシトス。

論者或ハ云ハン。心臟病患者ニ心部冷却法ガ有效ナルハ、局處の深達作用ナラント。サレド胸

第十六圖



壁冷却ニヨリ、肋膜腔内ノ溫度ヲ一五度下降セシメンガ爲メニハ、三十分間ヲ要ス、又心臟ノ前壁ノ溫度ヲ三二五度下降セシムルニハ、四十八分。心臟内ノ流血ヲ〇三七度冷却スルニハ、四十八分ヲ要ス。然ラバ、余ノ實驗ノ如ク、冷却後僅カニ一乃至二分ニシテ心臟ノ安靜ヲ來セルハ、決シテ局處の深達作用ニアラズシテ、一定ノ反射機能ニヨルモノナルコト明カナリ。

尙ホ茲ニ一言セザルベカラザルコトアリ。即チ唯一例ニ於テ余ハ、心部冷却ニヨリテ心尖搏動ガ却テ強大トナリシヲ實驗セシコトアリ。之レ全ク患者ガ冰囊ヲアツルコトヲ甚シク嫌厭セシニ基因ス。總テ被檢者ガ不愉快ナル精神感動ヲ有スル時ハ、血液ハ腸ニ集マリ、腦、四肢、皮膚ノ血管ハ收縮スルモノナルハ、既ニウエーベル、レーマン及ベルゲル等ノ說ケル所ナリ。即チ此例ニ於テハ、該實驗ガ「不愉快」ナル刺戟ヲ與ヘ、恰カモ、四肢ノ冷却ト同ジク、四肢ノ血量減ジ、從ヒテ心收縮ハ催進セラレタルモノナルベシ。

グラムゼルモ五例中一例ニ於テ、冷却ノ際ニ腦及ビ耳殼ガ共ニ其容積ヲ減ジ、ダストルーモラート說ニ相一致セザルヲ見、之ヲ以テ被檢者ガ不愉快ノ感ヲ起セルニヨルト説明セリ。總テ神經質ノ人、飲酒セル者、及ビ疲勞セル人ニ於テハ血液分佈ノ状態ハ全ク不規則ナルハ一般ニ確認セラレタル所ナリトス。

故ニ患者ガ甚シク胸部冷却ヲ増悪スル場合ニハ、強ヒテ之ヲ行ハザルヲヨシトス。然モ最モ多クノ心臟病患者ハ、心部冷却ヲ主觀的ニ歡迎スルモノナルハ、一般ニ目撃セラレタル所ナルベシト信ズ。

第五項 肺出血及腸出血ノ冷却療法

肺出血及腸出血ニ際シテハ、醫家ハ胸部或ハ腸部ヲ冰囊ヲ以テ冷却スルヲ常トス。然レドモダストルーモラートノ定則ニ從ヘバ、皮膚ヲ冷却スレバ、内臓ノ血管擴張スルモノナレバ、却テ肺或ハ腸ノ出血ヲ増悪セシムベキ理ナリ。之レ古來醫家ガ經驗上ヨリ定メタル療法ト相反ス。之ニヨレバ、肺或ハ腸出血ニ冷却法ガ有效ナルハ、又ヘッド氏帯ノ作用ニヨルナルベシ。

尤モ肺ノ血管運動神經ノ存否ニ就テハ、未ダ定説ナキヲ以テ、唯茲ニ附記シテ參考ニ供スルノミ。

且ツ肺或ハ腸出血ニ際シ、冰囊ヲ用フル時ハ、爲メニ患者ハ、已ムヲ得ズ、身體ノ安靜ヲ守ラザルベカラズ。之モ亦確カニ止血ニ對シ、有效ナルベキハ論ヲ俟タズ。

第六項 鎮痛法トシテノ溫罨法

種々ノ内臓疾患ニ對シ、鎮痛法トシテ吾人ハ常ニ溫濕布、懷爐又ハ加熱セル莖莖或ハ粥ヲ用

フ。是等ノ奏效ハ、局處の深達作用ノ如ク、一定ノ長キ時間ヲ要スルモノニアラザルハ、茲ニ贅言ヲ要セザル所ニシテ、之モ亦、ヘッド氏帯ノ一治療的應用ニ外ナラズト云フベシ。

第七項 鍼灸術

古來我邦ニハ鍼灸術ナル特殊ノ治療法アリ。或疾患ニ際シ、一定ノ部位ヲ鍼又ハ灸ヲ以テ刺戟スル時ハ治效アリ。之レ亦、ヘッド氏帯ノ治療的應用ニヨルモノナルヲ以テ、鍼又ハ灸ヲ以テ刺戟スル部位即チ經穴ハ、必ズ病變アル内臓ニ一致セルヘッド氏帯ナラザルベカラズ、此詳細ニ就テハ後章ニ於テ詳述スル所アルベシ。

第五章 灸 術

我東洋ニハ古來灸術 Moxibustion ナル特殊療法アリ。支那ニテハ伏羲ノ昔ヨリ始マリシヲ欽明天皇ノ御宇初メテ我邦へ輸入セルモノナリ。千六百七十九年ニ至リテブシヨフニヨリ、歐洲ニモ傳ヘラレ、一時世人ノ驚歎スル所タリシモ、十八世紀ノ後半期ニハ既ニ全ク顧ミラレザルニ至レリ。其後、ブトー、ベルシー、ラレー等ニヨリ又世人ノ注目ヲ惹起セシモ、熱燒ナレモ灼法カナルノ發明セラル、ニ及ビ遂ニ全ク用ヒラレザルニ至レリ。

本邦ニ於テモ、西洋醫學ノ輸入ノ爲メニ、其跡ヲ潜メ、僅カニ、鍼灸業者ノ間ニ、其餘脈ヲ保チ、民間ニ流布シツ、アルニ過ギザルノ窮境ニ陥レリ。

之レ蓋シ、其學術的研究ヲ缺クニ基因セル當然ナル運命ナルベシト雖、然レドモ、實際上、種ノ疾病ニ對シテ、治效アルハ、古來ノ實績ニ徴シテ明カナリ。之レ一部人士ガ侮蔑ノ眼ヲ以テ遇スルニモ拘ラズ、政府當局者ガ治療法トシテ許可セル所以ナルベシ。

灸術ハ營ニ暗示的ニ作用スルモノナルカ、或ハ他ニ個有ノ作用ヲ有スルモノナルカ。逐次章ヲ改メテ、之ヲ詳述セント欲ス。

第一項 もぐさ灸

もぐさトハもろぐさ(燃草)ノ略語ニシテ、Mogsaナル語モ亦、其語原ヲ同ジクスルナルベシ、もぐさ(艾)ハ原野ニ生ゼルよもぎヲ、三月ヨリ六月ニ至ル間ニ、葉及ビ莖ヲ刈リ採リ、之ヲ陰乾ニシタル後、石臼ニ入レ木杵ニテ能ク搗キ、篩ニテ濾シテ、其夾雜物ヲ去リ、纖維ノ綿ノ如クナレルモノナリ。

灸術トハ此艾ヲ、經穴或ハ灸點ト名クル一定部位ノ皮膚ノ上ニ貼シ、線香ノ火ヲ以テ、之ヲ燃燒セシメ、其溫熱刺戟ヲ治療ノ目的ニ應用スルモノナリ。灸ノ數ハ一個所ニ數箇ヲ施シ、之ヲ數日間反復スルヲ常トス。局部ノ皮膚ハ爲メニ、壞死ニ陥リ、周圍ハ潮紅シ、其治癒セル後ニ

於テモ長ク醜キ癩痕ヲ殘ス。

(一)艾ノ燃燒溫度。

艾ハ六百四十度ノ熱ヲ發シ、若シ此際風ヲ送レバ、六百七十度ニ達セシムルヲ得。櫻田、原田學士等ガ、電溫計ヲ用ヒテ測定セル結果ヲ表トシテ示セバ次ノ如シ。

艾柱ノ大サ	艾ノ燃燒溫度	家兎腹壁上ニ於ケル艾ノ燃燒溫度
長サ(耗) 九	一四	一三
長徑(耗) 一四	二五〇度	二〇〇度
短徑(耗) 一三	一三〇	九三・五
五・七	二・五	九三・五
五・七	三・五	八二・五
五・七	二・〇	六二・〇
五・七	二・〇	九〇

艾モ亦、他ノ溫度刺戟ト同ジク、其燃燒ニ際シテ、局所的深達作用ヲ示ス。即チ家兎ニ就テ行ヘル實驗ニヨレバ、一・二種ノ深部ノ溫度ハ大ナル艾柱ノ燃燒ニヨリ約三・五度。二種ノ深サニ於テハ約二度。二・三種ノ深部ニ於テハ〇・四五度上昇シ、二・五種以上ノ深部ニモ尙幾分ノ影響ヲ及ボスモノナルベシ。サレド一言ニシテ云ヘバ、灸術ノ熱ノ深達作用ハ他ノ溫熱療法ノ夫レニ比シ、特ニ強キ力ヲ有セズト云フベシ。

(二) 灸ノ血液ニ及ボス影響。

灸ノ直後二分間以内ニ採取セル血液ニハ常ニ白血球ノ增多ヲ認め、多キ時ハ約二倍。少ナキモ尙三十四%ノ増加ヲ示ス。而シテ翌日ニ至レバ一度殆ド平常ニ復シ、若局部ガ化膿スル時ハ、更ニ再ビ白血球増加スルモノナリ。今一例ヲ擧グレバ、施灸前、八二八ナリシ白血球ハ施灸直後ニハ一三二八一ニ増加シ、其翌日ニハ九七二三ニ低減シ、更ニ軽度ノ化膿ヲ來スニ及ビ、再ビ一〇三二一トナリ、次デ八五九四ナル殆ド常數ニ復歸セリ。

此白血球増加ノ原因ハ、不明ニシテ、眞ニ白血球ガ新成セラレタルモノナルヤ、或ハ單ニ他ノ體部ヨリ皮膚血管ニ白血球ガ集合セルモノナルヤ、未ダ遽カニ斷言ヲ下スコト能ハザレドモ、然レドモ其増加ガ突如トシテ來リ、又迅速ニ恢復スルヲ以テ見レバ、恐ラク筋肉ノ收縮。脈管張力及ビ血液竝ビニ淋巴循環ノ變化ニヨリ、組織又ハ臟器中ニアリシ白血球ガ、皮膚血管ニ向ヒ、出現セルニ基因スルモノナルベシ。而シテ局部ノ化膿後、更ニ再ビ白血球ガ増加スルハ、化膿ニ對スル生體ノ反應ニ外ナラズ。

白血球ハ灸ニヨリ増加スルコトアリ、或ハ却テ減少スルコトアリテ、其結果一定ナラズ。

(三) 灸ノ血管ニ及ボス作用。

末梢血管ハ灸ニヨリ縮小シ、消火後一分以内ニ再ビ舊ニ復シ、其後却テ施灸前ヨリモ血量増加ス。第十七圖、手指ノ容積曲線ハ明カニ這般ノ關係ヲ示セルモノナリ。

蛙ノ蹼膜。或ハ兔ノ耳殻血管ニ於テモ同様ノ現象ヲ認ムルヲ得。而シテ血行ノ殆ド全ク停止セル血管ニ於テモ、灸ノ刺戟ニヨリ再ビ明ナル循環ヲ開始スルコトアリ。

(四) 血壓及ビ脈搏。

灸ニヨリ血壓ハ亢進シ、脈搏ハ頻數トナル。今樫田、原田兩氏ガ東京、吾妻橋際ナル弘法大師灸ニ來リ集マレル患者ニ就キ、リヴァーロッチノ血壓計ヲ用ヒテ測定セル成績ヲ擧グレバ次ノ如シ。

患者ノ主訴	灸點ノ位置	血壓ノ變化(耗水血壓)	血壓上昇度
1 喘息及慢性腎臟炎	第七胸椎ノ右側	白一九八至二二二	一四
2 背痛	第七胸椎ノ左側	白一四〇至一五六	一六
3 健康ヲ維持スル爲	第七胸椎ノ右側	白九八至一三〇	三二
4 胃痛	第七胸椎ノ右側	白一一四至一三三	一九
5 肩癱、逆上	第三胸椎ノ左側	白一二三至一二八	五
6 「トラホーム」	第三胸椎ノ右側	白一三五至一五八	二三
7 「トラホーム」	第三胸椎ノ右側	白一二五至一三一	六
8 慢性氣管支炎	第三胸椎ノ右側	白九八至一一五	七
9 肺癆	第三胸椎ノ左側	白一三五至一四五	一〇
10 胃痛	第七胸椎ノ右側	白一一〇至一三二	一二
11 嗽咳、咯痰	第三胸椎ノ右側	白一一五至一三四	一九
12 喘息様呼吸困難	第三胸椎ノ左側	白一三四至一四八	一四

(五) 灸ノ腸蠕動ニ及ボス影響。

家兔ノ腹部ニ灸スレバ、著シク腸ノ蠕動高マリ、腹壁ヲ透シテ之ヲ認メ得ルニ至ル。或ハ直接之ヲ認メ得ザル場合ニ於テモ、聽診器ヲ用フレバ、著シク雷鳴ヲ聽取スルヲ得。斯ノ如ク腸ノ

蠕動ハ灸ニヨリ催進セラル、ト雖、其刺戟部ヨリ上方ノ腸部ナリシガ、將タ下方ナリシカ、腹腔内ニ於テ著シク迂回セル腸管ノコトナレバ、腹壁ヲ透シテ之ヲ證明スルコト能ハザリキ。梶田、原田兩氏ハ家兔ニ食物或ハ「リチチ」油ヲ與ヘテ、蠕動ヲ高メタル後、灸セシニ、明カニ減少セリト云フ。

(六) 灸ノ疲勞曲線ニ及ボス影響。

蛙ノ筋肉上ニ灸ヲ施ス時ハ、其筋肉ニ血行アル時ハ勿論、血行無キ時ニ於テモ、疲勞曲線ハ幾分恢復スルモノナリ。斯ノ如ク、血行ナキモ尙、疲勞恢復スルヲ以テ見レバ、決シテ灸ニヨリ血液循環ヲ催進シ、筋肉中ノ物質代謝分解産物ヲ除去シ、榮養ヲ供給スルニヨリ續發的ノ現象ニアラズシテ、灸ガ直接ニ筋肉ニ對シ、刺戟トシテ作用スルモノト云ハザルベカラズ。人體ニ於テモ、エルゴグラフヲ用ヒテ檢スレバ、多少疲勞恢復ノ效アルモノ、如シト雖、然レドモ、人體ニ於テ「エルゴグラフ」ヲ用ヒテ檢スルモ、之ヲ以テ直接ニ其筋肉ノ疲勞ヲ知ル能ハズシテ、唯、其中樞ノ疲勞如何ヲ示スモノナレバ、中樞ノ精神作用ニヨリテ左右セラル、コト、甚ダ大ナルベシ。

以上ノ實驗成績ヲ總括スレバ、もぐさ灸ヲ施ス時ハ六〇乃至二〇〇度ノ高熱ヲ動物體ニ與ヘ、循環系ニ一種ノ變化ヲ來スト雖、其結果ハダストルモラートノ定則ノ示セル如ク、攝氏

四十一度以上ノ温熱ガ皮膚ノ一部ニ作用セル時ニ全ク相同ジ。之ニヨレバ、單ニ上述ノ如キ循環系ノ變化ヲ來サシメント欲セバ、決シテ鍼灸術ノ所謂經穴若クハ灸點ナルモノヲ論議スルノ要ナク、背部ニ灸スルモ、或ハ四肢ニ於テスルモ、同一ノ結果ヲ來ス。

然モビール氏鬱血療法ト同一ノ目的ヲ以テ、一局部ニ充血ヲ起サシムル場合ハ之ヲ問ハズ、通常廣ク用ヒラル、ガ如ク、或内臟疾患ヲ治療セシメント欲スル時ハ、必ず一定ノ經穴ニ於テ灸ヲ施サルベカラズ。石坂氏ノ知要一言ニ曰ク。「愈穴すこしも差へば徒に好肉を傷りて病に益なし」ト。

而シテ經穴ナルモノハ、恰カモヘッド氏帶ト全ク相一致スルモノナリ(後章參照)。即チ灸ヲシテ有效ナラシメント欲セバ、必ず其疾患ニ相當セルヘッド氏帶ニ於テ、之ヲ施サルベカラズ。之ニヨレバ、灸ノ眞個ノ作用ハヘッド氏帶ニヨリテ初メテ其目的ヲ達スルモノニシテ、之ヲ換言スレバ、灸術モ亦ヘッド氏帶ノ一治療的應用ニ外ナラズ。

第二項 灸ノ種類

通常ノもぐさ灸ヲ施セバ、其熱感甚シク、且ツ施灸後、永ク醜キ癩痕ヲ殘ス。此缺點ヲ免レンガ爲メニ種々ノ變法アリ。味噌灸或ハお嬢様灸トハ皮膚ニ味噌ヲ塗布シ、其上ニ灸ヲ施スヲ

云フ。

熨灸又ハ温灸トハ、濕潤セル布又ハ紙ヲ隔テ、施灸スルモノニシテ、之ニヨリテ温刺戟ヲ緩和ナラシムルヲ得。

壓シ灸トハ稍、厚キ紙ニテ造レル圓筒中ニ固ク艾ヲ詰メ、長サ約十八糎、太サ小指大トシタルモノニ點火シ、其燃燒シツ、アル一端ヲ二乃至三層ニ折疊ミタル紙ヲ隔テ、皮膚上ニ貼シ、輕壓ヲ加フルニアリ。此際、下敷トナレル紙ハ黃褐色ニ焦ゲルノミニシテ、受術者ハ局部ニ爽快ナル温熱ヲ感ジ、肩癢、頭痛、腰痛等ニ效アリト稱セラル。

油灸ハ燈心ニ種油ヲ吸ハセ、之ニ點火シテ文錢ノ孔ヨリ皮膚ヲ燒クモノナリ。水灸ト稱シ、左ノ如キ處方ヨリナル藥液ヲ塗布スルモアリ。

(一)龍腦 一匁。薄荷腦 二匁。酒精適宜。

右三品ヲ混和シ、之ヲ筆軸又ハ箸ニテ患部ニ點ズ。

(二)礞砂精 一匁。白礬 一匁。樟腦 二匁。

右三品ヲ混和密閉シ置キ細根ヲ以テ局處ニ點ズ。

(三)「グリセリン」 五〇〇。硝酸 二〇〇。龍腦 三〇〇。

右三品ヲ混和シ、細キ棒先ニ潤シテ局處ニ點ズ。但シ本法ハ有害ト認メラレ不許可。

又ハ墨灸トテ、左記ノ藥品ヲ點ズルコトアリ。

(一) 麝墨 一匁。 龍腦 二匁。 米二匁。

右ハ黃柏五匁ヲ水一合内ニ投ジ、緩火ヲ以テ五勺ニ煎ジツメ、此汁ヲ以テ和墨ヲ摺リ、濃液トナリタルヲ度トシ、此液汁中ニ前記三味ヲ混ジ、能ク攪拌シ、之ヲ筆軸ニテ患部ニ點灸ス。

(二) 麝香 一分。 龍腦 一匁。 煤煙 適宜。 「ヒマシ」油 適宜。

以上四品ヲ能ク調和精煉シ、艾ニ混浸セシメ、之ヲ小豆大ニ丸メテ局部ニ宛テ、其上ニ艾灸ヲ點ズ。

此他漆灸ト稱スルモノアリ。

(一) 生漆 十滴。 樟腦油 十滴。 「ヒマシ」油 適宜。

右三味ヲヨク調和シ、晒艾ニ濕シテ含マシメ、恰カモ肉池ノ如キ程度ニ製シ、之ヲ小キ箸先ニテ局部ニ點ズ。

(二) 乾漆 十匁。 明礬 十匁。 樟腦 五匁。 艾 適宜。

右藥味ヲ粉末トナシ、黃柏ノ煎汁ニテ艾ニ混和浸潤セシメ、之ヲ木ノ小棍ニテ局部ニ點灸ス。

先ヅもぐさ灸ヲ施シ、然ル後、同ジ灸點ニ漆灸ヲ點ズルコトアリ。或ハ單ニ漆灸ノミヲ用フルコトアリ。

何レノ場合ニ於テモ、之ヲ點ズベキ所謂經穴ハもぐさ灸ノ時ニ同ジ。

第三項 溫灸即チ濕布ヲ隔テタルもぐさ灸

溫灸ノ循環系ニ及ボス作用ハ、全クもぐさ灸ニ相同ジ。然モ此際決シテ激烈ナル熱感及ビ疼

痛ヲ感ズルコトナシ、又醜キ火傷ノ跡ヲ止メズ(第十八圖)。

之ニヨレバ循環系ニ對スル作用ヨリ論ズル時ハ、もぐさ灸ノ如キ高熱ヲ用ヒルノ要ナク、溫和ナル溫灸ヲ用フルモ、尙充分ノ治效ヲ收ムルヲ得ベシ。

或ハ云ハン、もぐさ灸ガ循環系ニ及ボス作用ト、ヘッド氏帶ニ於テ神經ヲ刺戟スルトハ、自ラ異ナル所アルベキヲ以テ決シテ溫灸ヲ以テ、もぐさ灸ニ代用スル能ハズト。然レドモ熱ニ對スル神經ノ感受性ハ決シテ無限ナラズ。即チ神經ノ感ズル熱ノ最大限度ハ攝氏四十五度ナ

リ。之レ以上ノ高熱ガ作用スルモ、神經ハ全ク四十五度ト同様ニ反應スルモノナリ。血管運動神經ニ及ボス作用ガもぐさ灸ト温灸ニ於テ全ク同様ナルハ既ニ前述ノ如シ。

再ビ論ヲナスモノ或ハ云ハン。灸術ガヘッド氏帶ニ作用シテ内臟疾患ニ效アルハ、決シテ灸ノ發スル熱ノミノ作用ニアラズ、夫レニ伴ヘル疼痛ガ主作用ヲナスニアラズヤ。熱ヲ伴ハザル鍼術ガ有效ナルハ、即チ之ガ爲メナリト。

然レドモ彼ノ鍼術ニ就テ見ルニ熟練ナル鍼醫ガ正當ナル經穴ニ於テ鍼スル時ハ、殆ド無痛ナルハ世人ノ熟知スル所ナリ。之ニヨレバ少クトモ、もぐさ灸ノ施灸時ニ於ケルガ如キ激痛ヲ忍バザルベカラザル理由ヲ認メズ。

此他尙ホ顧慮スベキハ精神作用ナリトス。即チ「良藥ハ口ニ苦シ」トノ諺ノ如ク、苦味甚シキ程、其效果大ナルヲ思フハ人情ナリ。サレバ灸術ニ於テモ、通常ノもぐさ灸ニヨリ、甚シキ激痛ヲ忍ベバ、從ヒテ温和ナル温灸ヨリモ、其效果大ナルベキヲ豫想シ、此精神作用ニヨリテ兩者ノ間ニ差異ヲ生ズルコトモアリ得ベキコトナリ。然レドモ、今日ノ醫學ノ程度ヲ以テスレバ、良藥必ズシモ苦味ナラズ、激痛ヲ伴フもぐさ灸ハ必ズシモ温灸ニ優ルモノナラザル點ヲ明カニ教示スル時ハ、從來ノ慣習的信念打破セラレ、皆人共ニ、無痛無癢痕ナル温灸ヲ喜ブニ至ルナルベシ。頃者鍼灸業者間ニ、無癢痕灸ガ益ヲ行ハレントスルノ傾向アルハ、余ノ密ニ欣

喜措ク能ハザル所ナリ。

第四項 漆灸

漆灸ハ短時間内ニ急激ナル作用ヲ及ボスモノニアラザルヲ以テ、其循環系ニ對スル影響ハ之ヲ測定スルコト困難ナリ。

局處作用トシテハ、其塗布後ノ時間ノ長短ニ從ヒテ、發赤ヲ呈セルアリ、或ハ小出血斑ヲ認メ得ルコトアリ。甚シキハ炎衝ヲ惹起シ、或ハ水泡ヲ形成スルコトアリ。即チ引赤劑タルコトアリ、發疱劑タルコトアリ。一言ニシテ云ヘバ、漆灸ハ局處ニハ皮膚刺戟劑トシテ作用スルモノナリ。

今著者自身ニ就テ行ヘル實驗ヲ記サンニ、午後四時、上膊中央部ノ内面ニ、豌豆大ノ漆灸ヲ點ジ、繃帶ヲ施シ、翌朝ニ至リ、之ヲ檢セシニ、極輕度ノ發赤ヲ來セシノミニシテ、漆灸ハ悉ク繃帶ノ爲メニ拭ヒ去ラレタリキ。由テ午前十一時、更ニ豌豆大ノ漆灸ヲ點ゼシニ、午後八時ニ至リ、局部ニ刺スガ如キ感アリシヲ以テ、檢スルニ、直徑十八耗ノ發赤腫起アリ、其中央ニ、小豌豆大ノ水泡ヲ見ル。此水泡ハ午後十一時頃ニハ尙ホ少シク増大セリ。翌朝七時半ニハ、水泡ノ内容稍、減ジ、水泡壁ニハ少シク皺襞ヲ生ゼリ。衣服ノ接觸時ニハ疼痛アルモ、自發痛ナシ。六日ノ後ニハ腫起部ノ大サハ直徑三耗ニ達シ、發赤ハ尙ホ周圍ニ及ビ、且ツ處々ニ小出血斑ヲ

認ム。其後水疱ハ漸次減少シ、施灸後十一日ニシテ消滅セリ。サレド出血斑ハ尙ホ依然トシテ存ス。其後出血斑モ漸次褪色シ、施灸後十六日ニシテ初メテ消滅シ、唯水疱ノ生ゼシ部ニ、淡キ癩痕ヲ認ムルノミトナレリ。施灸後、中等度ノ搔痒ノ感アリシモ、忍ビテ搔把セザリキ。由是觀之、漆灸ハもぐさ灸ノ如ク急激ニ作用スルヲ得ズト雖、緩和ナル刺戟ヲ持續的ニ與ヘント欲スル場合ニハ、最モ適當ナルモノナルベシ。特ニ永續的ノ誘導法トシテハ最モ可ナルベシ。且ツ施灸時ニ些ノ疼痛ダモナシ。

然レドモ、實際漆灸ヲ受ケシ人々ヲ見ルニ、背部ニ數多ノ漆灸ヲ施セシガ爲メニ、激烈ナル搔痒ノ感アリ、甚シキ苦痛ヲ訴ヘ、睡眠ヲ妨ゲラル、コトアリ、或ハ不知不識ノ間ニ搔把シ、化膿傳染ヲ惹起スルコトアリ、其弊却テもぐさ灸ノ施灸時ノ灼熱ノ感、及ビ醜キ癩痕ニ優レルモノ、如シ。

且ツ漆灸ハ一種ノ皮膚刺戟劑ナレバ、濫リニ數多ニ、且ツ反復シテ行フ時ハ、爲メニ腎臟炎ヲ起ス事アリ。故ニ漆灸ヲ試ムルニ當リテハ、他ノ藥劑ヲ用フルト同ジク、ヨク其用量ニ注意シ、濫リニ數多ニ塗布シテ、廣汎ナル皮膚炎ヲ來サシムルガ如キコトアルベカラズ。加之、用量ヲ注意スルノミナラズ、先ヅ豫メ檢尿シテ腎ノ健否ヲ確カムルヲ可トス。

第六章 鍼灸ノ經穴トヘッド氏帶

古來鍼灸術ニハ其鍼灸ヲ施スベキ定マレル點アリ。之ヲ經穴ト云フ。各流派ニヨリ其數ヲ異ニスルモ、鍼灸重寶記ニヨレバ、凡ソ經穴ハ三百六十二ニシテ、之ヲ以テ經ノ正道トス。此外阿是ノ穴ナルモノアリ。阿是ノ穴トハ絡穴ニ拘ラズ、三百六十穴ノ外痛ム處ヲ押シテ鍼灸ヲ行フヲ云フ。之ヲ天應ノ穴トモ散針トモ云フ。神經痛ノ壓痛點ノ如キ、即チ之ナリ。

余ハ茲ニ鍼灸ノ經穴トヘッド氏帶トヲ比シテ、兩者ノ關係ヲ究メント欲ス。サレド三百六十ノ經穴ニ就テ、一々之ヲ究メンハ容易ノコトニアラズ。今唯經穴中、内臟疾患ニ關スル主ナル經穴ニ就テ考フルニ、全クヘッド氏帶ト相一致ス。

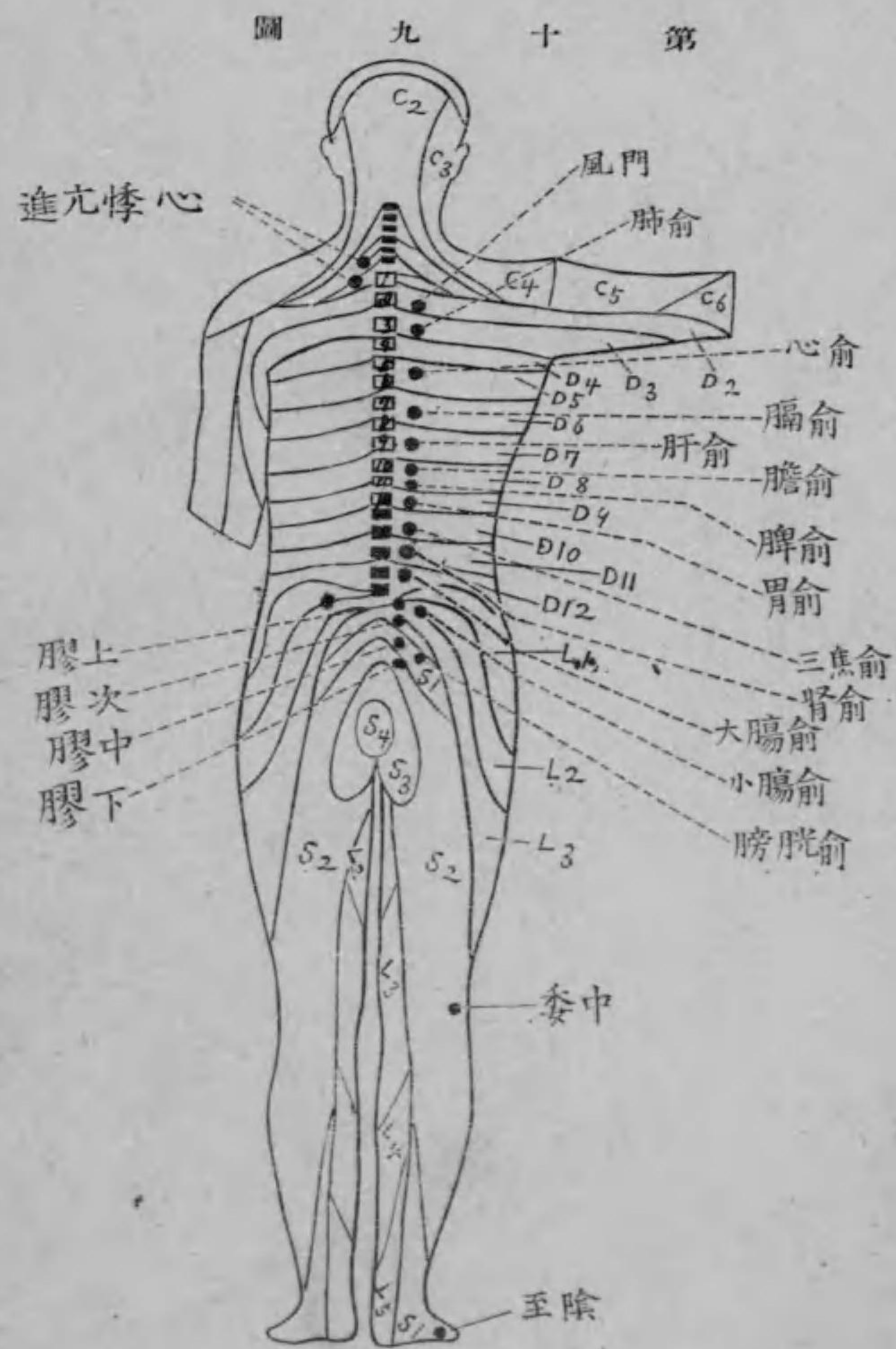
余ハヘッド氏帶ト經穴トノ一致ヲ示サンガ爲メニ、ヘッド氏帶ノ圖譜ニ經穴ヲ記入セリ。之ニヨリテ一目瞭然ニ兩者ノ關係ヲ認ムルヲ得ベシ。

各府縣鍼灸術試驗問題解答集ヲ繙クニ

「心臟ニ對シテハ、第一乃至七頸椎ノ兩側。腹部内臟即チ胃、腸、子宮、膀胱、腎臟、肝臟ニ對シテハ、第一乃至五腰椎ノ兩側ニ鍼ス」。

トアリ。而シテ第一乃至五腰椎ノ兩側トハ、*D.1-5* 及ビ *L.1-5* ト略、一致ス。之レヘッド氏帶ト經

鍼灸ノ經穴トヘッド氏帶
穴ノ一致ヲ綜括セルモノト云フベシ。



尙、體ノ上部ニ存スル臟器ヨリ順次ニ記載スレバ左ノ如シ。但シ鍼灸ノ書ニハ病名ヲ記サズシテ、個々ノ徵候ヲ記セルモノ多シ。余モ亦故意ニ鍼灸ノ書ノ記ス處ノマ、ヲ引用スルコトトセリ(第十九及第二十圖)。

心機亢進ニハ第七頸椎及ビ第一胸椎ノ兩側上ニ點灸ス。之レC₇、D₁ニ相當ス。

風門ハ胸背痛、咳嗽等。肺俞ハ癩症、癆熱、肺萎、尙、咳嗽等ニ鍼灸ス。之レD₂、D₃ニシテ肺ノ

ヘッド氏帶ニ相當ス。

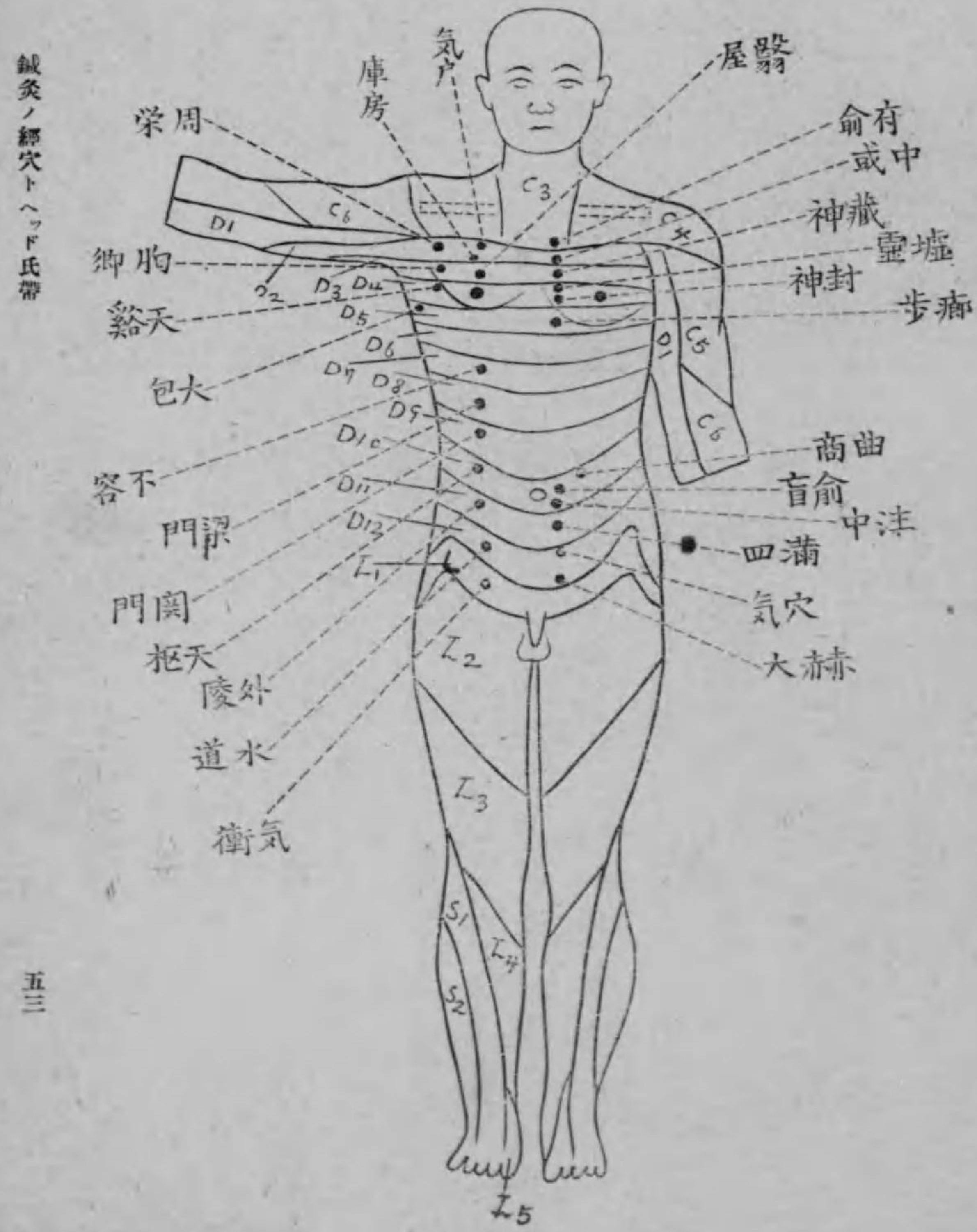
急性下痢及ビ下腹痛ハ第六乃至十一脊椎神經ヲ目的トシテ、胸椎ノ下部及ビ腰椎上部ノ各側ニ鍼灸ス。胃痙攣ニハ腰椎第一乃至第二、或ハ第二乃至第三ノ横突起間ヲ目的トス。急性吐瀉ニハ第十二胸椎ト第一腰椎間及ビ第一乃至第二腰椎ノ横突起間(胃俞、三焦俞、巨關、上腕、中腕)ニ鍼灸ス。是等ハD₁₂ニ相當ス。

疝痛ニハ腰椎各側(三焦俞、腎俞、大腸俞、小腸俞)ニ鍼灸ス。之レD₁₀ニ相當ス。

子宮痙攣ニ對シテハ、腰部第四乃至五腰椎兩側及ビ薦骨部ノ後面ニ於テ鍼灸ス。之レD₁₂、L₁ニ相當ス。

膀胱麻痺ニハ上膠、小腸俞、次膠、膀胱俞ニ鍼灸ス。之レS₁、S₂ニ相當ス。而シテ鍼灸術ガ神經ノ反射作用ナル證トシテ膀胱疾患ニハ必ズシモ膀胱ニ近キ上記ノ經穴ナラズトモ、下肢ニ存

第二十圖



鍼灸ノ經穴トヘッド氏帶

鍼灸ノ經穴トヘッド氏帶

スル委中或ハ至陰ナル經穴ニ於テ鍼灸スルモ、之レガヘッド氏帶 S_1 S_2 ニ相當スルヲ以テ亦有
效ナリ。

背部ニ於ケル主ナル經穴ニ就テハ既ニ述ベタリ。而シテ通常ハ背部ニノミ鍼灸スルコト多
ケレドモ、前面ニテモ、ヘッド氏帶ト經穴ノ一致セル狀ヲ示セバ次ノ如シ。但シ鍼灸ノ書ニ於
テモ、背部ニ於ケル經穴ハ、脊椎ヲ標準トセルヲ以テ了解シ易ケレドモ、前面ニ於テハ唯ニ各
經穴相互ノ關係ヲ記シ、例ヘバ、

「氣戶ハ璇璣ノ旁、胸骨中線ヲ開クコト各四寸。庫房ハ氣戶ノ旁ヲ一寸五分云々」

トセルヲ以テ、背部ニ於ケルガ如ク精密ニ之ヲ定ムルコト能ハズ。故ニ余ハ經穴ノ記載ヲ讀
ミ、且ツ附圖ヲ參照シ、鎖骨、乳房、季肋部、臍、鼠蹊部ヲ目標トシ、以テ左ノ模型圖ヲ畫ケリ。
(第二十圖)。

氣戶、庫房、屋翳ハ胸背痛、呼吸不利、喘息、咳逆ニ效アリ。 D_2 D_3 ニ相當ス。

天谿、胸鄉、周榮、大包ハ胸痛、咳嗽等ニ效アリ。 D_1 — D_5 ニ相當ス。

步廊、神封、靈墟、神藏、或中、俞府ハ胸痛、呼吸少氣、咳逆、嘔吐ニ效アリ。 D_2 — D_5 ニ相當ス。
不容ハ肝及ビ膽囊疾患ニ效アリ。 D_7 ニ相當ス。

梁門ハ大便滑瀉、完穀化セズ。關門ハ腹鳴泄痢、廻臍痛ニ效アリ。

天樞ハ泄瀉、疝張、赤白痢、腹鳴、腹脹、繞臍切痛、時々上冲、霍亂、婦人癥瘕(卵巢囊腫)、血結塊成漏下、赤白月事不調ニ效アリ。外陵ハ腹痛ニ效アリ。是等ハD₁₁乃至D₁₂ニ相當ス。

水道ハ婦人張滿、月心痛、腰痛、陰冷、大小便不通ニ效アリ。D₁₂ニ相當ス。

氣衝ハ辜丸冷痛、陰萎、莖痛、腰痛、經事不調、子嗣或ハ胞衣胎盤出デザルニ效アリ。L₁ニ相當ス。

大赫ハ失精、陰萎、陰縮、莖痛、婦人赤沃ニ效アリ。氣穴ハ痢疾、臍下切痛、婦人月水不調、惡血疔痛ミ。四滿ハ癥聚疝痛、月經不調、臍下切痛ニ、中注ハ小腸熱アリ、大便堅或ハ泄瀉或ハ月事不調ニ效アリ。是等ハD₁₀乃至L₁ニ相當ス。

盲俞ハ腹切痛、寒疝、商曲ハ腹痛、切急食ヲ欲セザルヲ治ス。D₁₀ニ相當ス。

肋膜炎ニハ刺鍼ハ無效ナリト云フ。而シテ肋膜炎患ニハヘッド氏帶ナキコト既ニ前記ノ如シ。

斯ノ如ク、經穴トヘッド氏帶トハ全ク相一致ス。之ニヨレバ、鍼灸ノ經穴ナルモノハ、古來經驗上ヨリ得タルヘッド氏帶ヨリ定メタルモノナルベシ。茲ニ於テカ、痛覺及ビ溫覺過敏ナルヘッド氏帶ニ、鍼或ハ灸ヲ行ヒ、痛覺或ハ溫覺ヲ與フル時ハ、反射的ニ其ヘッド氏帶ニ相當スル内臓ノ疼痛ヲ減ジ、自覺的症狀ヲ輕減シ得ベキ理ナリ。

灸ハ循環系ニ對シ、上記ノ如キ一定ノ作用ヲナスト雖、之ガ内臓疾患ニ有效ナルハ、主トシテヘッド氏帶ノ治療的應用ニ外ナラズ。若シ循環系ニ對スル作用ノミヲ満足スベクンバ、決シテ經穴ヲ選ムノ必要ナク、體表面ノ何レノ部位ニ於テ點灸スルモ、其結果ハ同様ナリ。然モ正當ナル經穴ヲ選バザルベカラザル所以ハ、全クヘッド氏帶ノ作用ナルニヨル。而シテ灸ヲ施スニ當リテモ、神經ノ熱刺激感應度ハ、其最高限度四十五度ナルヲ以テ、普通ノもぐさ灸ノ如ク、激痛ヲ伴ヒ、且ツ永ク醜キ癢痕ヲ殘スモノヲ強ヒテ用フルノ必要ナク、溫和ナル溫灸ヲ以テ最モ合理的ナリトス。

第七章 灸術ノ治療的作用

以上述べ來リタル灸術ノ治療的作用ヲ綜括スレバ次ノ如シ。

- (一) 灸ハヘッド氏帶ヨリ神經ヲ介シテ、内臓ニ作用シ、以テ自覺的症狀ヲ輕減スルコトヲ得。此作用タルヤ、灸術ノ主作用ナルヲ以テ、灸ヲ施スニ當リテハ必ず正當ナル經穴即チ其病變アル内臓ニ相當スルヘッド氏帶ニ於テ、之ヲ行ハザレバ、徒ラニ好肉ヲ破リテ害アリテ益ナキコト、石坂氏ノ言ノ如シ。サレバ患者ノ病狀ヲモ尋テズ、神佛ノ夢告ナリトシテ、千遍

一律ノ灸點ニ於テ灸ヲ施スガ如キハ、深ク警メザルベカラズ。
 (二) 灸ハ血液ノ循環ヲ催進セシム。故ニ血液或ハ淋巴液ノ鬱滯ニ因スル障礙例ヘバ肩癱等ニ對シテハ有效ニ作用ス。

(三) 灸ヲ施セバ其局處ニハ充血ヲ來スヲ以テ、鬱血療法ノ意味ニ於テ之ヲ用フルヲ得。

(四) もぐさ灸ヲ施セバ、高熱ニヨル火傷ノ爲メニ、局部ノ組織ハ壞死ニ陥ル。故ニ烙鐵腐蝕法或ハ「バクエリン」焼灼法ト同様ノ目的ニ之ヲ使用スルコトヲ得。此好適例トモ云フベキハ、上州草津温泉ニ於テ、癩病患者ニ施セルモノナリトス。即チ皮膚ノ斑紋癩、結節癩等ノ上ニ殆ド間隙ナク、甚ダ數多ノ灸ヲ施シ、直接ニ其癩組織ヲ焼灼破壞シテ癩痕形成ヲ促シ、治療ヲ計ルモノニシテ、此際患者ハ該部ノ知覺脫失ノ爲メニ、殆ンド之ガ爲メニ苦痛ヲ覺ヘザルモノナリ。

斯ノ如ク局部ノ焼灼ヲ目的トスル時ニハ、もぐさ灸ヲ用ヒザルベカラザルハ、茲ニ噸々スルノ要ナシ。然レドモ、日常最モ多ク用ヒラル、灸術ノ作用ハヘッド氏帶ノ治療的應用ニ外ナラザルヲ以テ、殊更ニもぐさ灸ノ激烈ナル熱ヲ堪ユルノ必要ナク、無癩痕無痛ナル溫灸ヲ以テ最モ合理的ナリトスルコト、既ニ前述ノ如シ。

カノ熱氣療法、或ハブリーゲルノ蒸氣「マッサージ」Dampfhschenmassage モ亦同様ノ效果

ヲ奏スルヲ得。然レドモ是等ニハ複雑ナル裝置ヲ要ス。此點ニ於テハ溫灸ノ簡單ナルニ及バズト云フベシ。

第八章 鍼 術

鍼術 Akupunktur ノ作用ニ關シ、石坂氏ハ其著知要一言ニ曰ク

「偕テ其要を云はんに、竹木のごげの身に立ちたるも、金銀の針の身にたちたるも、おなじくごげなり、誤りてたつと、術有て刺ごの相違あるのみ。竹木のごげ立たらば、人力のおよぶだけは、ぬきさるべし。もし人力にてぬげざれば、その人の自然の元氣を以て、ごげの有處を、いよく熱を盛にし、其熱にて、腐れて膿となし、人力にてぬげぬごげ、膿と共に、潰て身の外にぬけいづる也。

膿出で熱除、もこの、むきすの身となるが如し、術ありて金銀鐵の針がねを病のある處に刺入れば、竹木のごげの有處に熱を生ずるが如く、精神榮衛ごもに、力をいれて、針の下に集り來るなり。しばらく針を留め、ほどなく針下を集めて、その針をぬきされば、集まりたる精神榮衛にて、病邪をおひちらして、忽に消除事、風の雲を吹がごとし。……則ち人

參、附子、峻烈の薬を用ひて衰弱したる元氣を引おこし、努張するを、おなじ術と心得べし。之ニヨレバ針ハ異物トシテ作用シ、其局部ニ充血及ビ白血球增多ヲ惹起スルモノナリ。明治三十九年、三浦(謹)博士鍼法ノ生理ニ就テ曰ク。

(一) 兎ニテ檢セシニ、刺戟部ノ上方ニテ腸管ノ攣縮ヲ起シ、下方ニテハ弛緩ス。鍼法ガ腹痛ニ效アルハ、恐ラク腸ノ蠕動ヲ靜止スルニヨルナラン。

(二) 運動神經ノ興奮性減少ス。恐ラク知覺神經モ然ラン。組織學的ニ檢セシニ、針セシ部ノ神經纖維ノ變質ヲ認メタリ。

(三) 血管ハ收縮シ、血行遲緩ス。(蛙ノ坐骨神經ヲ刺シ、蹠膜ニテ檢セリ)。

(四) 筋肉收縮ノ曲線ヲ描カシメシニ、疲勞セル神經ノ如ク、上行下行枝緩徐トナレリ。

要スルニ鍼ハ一種ノ麻醉劑ノ如ク作用スト。

余モ亦、家兎ニ多量ノ食物ヲ與へ、腸ノ蠕動ヲ盛ナラシメ置キ、然ル後、腹部ニ針セシモ、腹壁ヲ透シテ認メ得ベキ蠕動ノ變化ナカリキ。

今、三浦博士ノ說ニ從ヒ、鍼術ハ一種ノ麻醉劑ノ如ク作用ストスルモ、之ハ神經痛ノ如キ場合ニ、直接ニ神經ヲ針ヲ以テ刺セシ時ニ然ルノミニシテ、内臟疾患ニ際シ、或一定ノ遠隔ナル皮膚ニ針シテ治效ヲ收ムルガ如キハ、之ヲ以テ説明スルヲ得ズ。カ、ル内臟疾患ニ於テハ、鍼術

ハ又ヘッド氏帶ノ治療的應用ニ外ナラザルベシ。カノ正當ナル經穴ヲ得テ、針セザルベカラザル所以モ亦、實ニ茲ニ存ス。

第九章 ヘッド氏帶ノ臨牀的應用總括

ヘッド氏帶ノ臨牀的應用ハ之ヲ次ノ如ク總括スルコトヲ得。

(一) 診斷的應用。

ヘッド氏帶ハ各臟器ニ相當セル或一定部ニ生ズルモノナレバ、之ニヨリテ、診斷ヲ容易ナラシムルコトアリ。余ガ膀胱結石症ノ患兒ニ於テ、膀胱ニ匹敵セルヘッド氏帶S₂即チ膝關節ノ屈曲面ニ著シキ知覺過敏帶ヲ證明スルヲ得タリシハ、此一適例タルヲ失ハズ。而シテヘッド氏帶ノ検査法ハ最モ簡單ニシテ、特別ノ裝置ヲ要セズシテ、尙ホ之ヲ行フコトヲ得ルモノナレバ、診斷ノ一補助法トシテ、必ず試用スベキ價値アルモノト云フヲ得ベシ。

(二) 治療的應用。

文獻ニ徵スルニ、ヘッド氏帶ノ治療的應用ハ其例、甚ダ少ク、唯ヘッドガ知覺過敏帶ニ「コカイン」軟膏ヲ塗布シ、ヘーテルガ芥子軟膏ヲ塗布シテ、效果ヲ收メタリト云フニ過ぎズ。ゴ

―ルドシャイデルハ水治療法ニ際シ、ヘッド氏帯ガ何等カノ影響ヲ及ボスモノナラント稱
ヘシモ、多クノ學者ハ之レヲ承認セザリキ。サレド余ノ實驗成績ニヨレバ、ゴールドシャイ
デルノ説ハ動カスベカラザル眞理ナリ。唯、多クノ學者ガ之ヲ否認セル所以ハ、恐ラク是等
ノ學者等ハ、健康體ニ就テ實驗セルヲ以テ、ヘッド氏帯ナカリシニヨルナルベシ。
少クトモ、古來總テノ醫家ガ臨牀上ニ應用シツ、アル濕布、冰囊、例ヘバ、腦膜疾患患者ノ
頭部冷却。心臟病患者ノ胸部冷却。肺出血又ハ腸出血患者ノ胸部又ハ腹部冷却、鎮痛法トシ
テノ溫罨法。或ハ鍼灸術ガヘッド氏帯ヲ介シテ、初メテ其治療的効果ヲ現ハスモノナルハ
既ニ前章ニ於テ詳述セル所ナリ。
由是觀之、ヘッド氏帯ノ治療的應用ハ決シテ其例少ナシト云フヲ得ズ。唯學術的ニ其效果
ガヘッド氏帯ヲ介シテ、初メテ達セラル、モノナルコトノ證明ヲ缺ギタリシノミ。然モ其
效果ニ就テハ古來ノ經驗ニ徴シテ、毫モ疑ヲ挾ムノ餘地ヲ認メズ。

ヘッド氏帯ノ臨牀的應用ト鍼灸術終

大正六年九月二十五日印刷
大正六年 拾月 八日發行

定價金四拾五錢

著 者 後 藤 道 雄

東京市本郷區西片町十番地

發 行 者 橫 山 大 槌

東京市本郷區駒込林町百七十二番地

印 刷 者 櫻 井 新 三 郎

東京市本郷區駒込林町百七十二番地

印 刷 所 杏 林 舍



發 行 所 東京市本郷區西片町十番地 刀 圭 書 院

~~80~~ 492.7
~~386~~ 472

25.10. 9

25.10. 9

終